

---

SeA Side

鬼之子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Sea Side

### 【Nコード】

N2306V

### 【作者名】

鬼之子

### 【あらすじ】

潮の香りが風に乗って漂う喉かな海沿いの町『鳴濱町<sup>めこのはま</sup>』。主人公、塔原裕樹<sup>とうのはろき</sup>は、最近ここに引っ越してきたばかりの中学三年である。事件は彼の父親が、女子生徒の行方不明になったという噂を聞いたことから始まった。そして発見される水死体。それは行方不明になった女子生徒をいじめていた主犯であった。いじめを悔いての自殺か？ それとも他殺か？ 若しくは呪いか？

## プロローグ

『——お母さん、先立つ不幸をお許し下さい——』

これだと普通か？

というよりかは在り来りすぎてマンネリする。

大体、『先立つ』っていうのは、『先に死ぬ』という意味がある。それに『お許し下さい』って、簡単な言葉で終わらせるものではない。

今からすることは、本来『許す』で済まされる事ではない。

『恥の多い生涯を送って来ました』

どこの文豪が書いた文章だ？

その人は入水自殺をしたと云われているが、それ以前から、狂人のように自殺を繰り返していたといわれている。

それに心中なんてのもやっていたみたいだが、最後に愛人と心中するまで生きていたのだから、どちらかというと運がいいほうなのだろう。

どうして神様はそんな人を死なせたんだろうか？

確か享年38歳と、私の二周りくらいの人生しか生きていないことになる。

別の文豪作品となるが、猫が麦酒<sup>ビール</sup>を飲んで、酔っ払ってしまい、水瓶<sup>みずがめ</sup>に落ちて死ぬという小説がある。

——それとは違うか……

靴を脱ぎ揃え、ふと考える。

どうして人は自殺する時、靴を脱ぐのだろう。  
何かの小説に書いてあったが「幽霊には足がないから履き物はいらない」と記されていた。

しかし、同じ小説で「牡丹灯籠のお露さんはカランコロンと下駄の音を鳴らしている」とも記されている。

同じ幽霊なのに、足があるのとないものに分かれる。  
いったいどっちが正解なのだろうか？

色々と考えながら立っていると、潮の香りが風に乗って鼻に引っかけた。

波の音が荒々しく聞こえてくる。

——先立つ幸せをお赦し下さい——

私はそう頭の中で呟いた。今から死ぬというのに、幸せとは不釣り合いだ。

まったくもって……

風が止んだのを感じ、私は身を投げ出すというよりは、ストンと落ちるように崖から落とされた。

落ちていく間、見えたのは霞みかかった夕日だった。

## プロローグ（後書き）

どうも。今回は単発長編ですが、よろしくお願いします。

## 1・汐の町（前書き）

汐：夕方の干満（IMEの変換辞書より）

## 1・汐の町

静寂した教室の中、正面にある黒板の上にかけられている時計から聞こえてくる秒針の音と、テスト用紙の上にシャーペンを走らせている音。たまに芯が折れる音が、俺の耳に聞こえてくる。

「はあゝっ」と深い溜め息。一応人に聞かれないように小さな音で、もう一度溜め息を吐く。

俺、めいのはみ塔原裕樹は、目の前に出されている抜き打ちテストに必死だった。

ここ「めいのはみ鳴濱町」に引越してきたのは彼此かれこれ一週間前なのだが、今の学校がどこを習っているのか、前の学校よりも先だったら、必死になって追いつきたいし、それよりも前だったら、少し足踏みしてやってもいいわけだが……

そんな俺の考えなんぞ、知ったこっちゃねえと、どこぞの芸人みたいな感じに云われそうな気分だった。

『まったくわからん』

一応外国語のテストなのだが、正直に言おう。

外国語は千差万別。普通、中学では英語を習うはずだよなあ？

Je vous assassine et vous m'assassinez encore

わかるか、これ？

これって、英語じゃないよな？ どこをどう見てもフランス仏語だ。

こんなの前の学校じゃ習っていないし、そもそも、普通は英語じゃないのか？

ええ〜つと、ええ〜つと……と、考えているうちに時間は過ぎていく。

もしも時間が止められる力があつたとすれば、すぐにでも止めた気分だ。――が、そんなのあるわけがない。

もう一度テスト用紙を見る。――筆記だから、余計にわからん。マークシートだったら、適当に塗っていけば、もしかしたら一問くらいは正解できたかもしれない。

そんなことは夢のまた夢と、豊臣秀吉みたいなことを考えるが、結局一門も答えられずにテストは終了した。

先生、採点なんてしないでいいぜ？ 自分でも0点だってわかってるからな。

「終わったあ〜つ」と、クラスメイトの御手洗湊みたらい みなとが背伸びをしながら言った。

胸を張ったことで、その豊満な胸が余計に大きく見える。どうやらFはあるらしい。

「今日のテストちよつと簡単だったね」と信じられないことを言ったのは、委員長の五ヶ山恵子ごかやま えこだった。

そりゃ確かに、普段から仏語を勉強している方からしてみれば簡単なんだろうけどさあ……

御手洗と一緒にあって、話しているが、どうやらテストでどこがわからなかったのかを確認しあっているようだった。

「あれ、裕樹くん、どうかしたの？」と五ヶ山が声をかけてきた。

俺は少し咳払いをし、口を開けようとしたが、

「もしかして、テスト駄目だったとか？」と俺の返答を待たずに尋ねる。

そつ、全く以て正解。仏語なんぞ、さっぱりわかりませんでした。と言いたいのだが、それは頭の中で呟くだけにしておこう。——なんか惨めだと思ったからだ。

「別に気にする事ないわよ。わかんない事があつたら人に尋ねればいいわけだし」

御手洗が正論を言う。まあ、そういう方法が一番なんだが、今は必死にそれが訊けるように勉強している真つ最中だ。大体仏語なんて、ボンジュールくらいしか知らない。

それがここにきてどうだ？ 単語すら覚えきれてねえのに……テストは殆ど文章訳文。単語問題なんて出てきやしねえ。

「それはそうと、湊、背伸びするのはいいけど、あんまりやってると目に悪いわよ」

五ヶ山の言葉に御手洗は首を傾げる。

「ほら、この前胸元のボタンが取れて、せっかく縫ったばかりなのに、もう取れそうになってるじゃない」

そう言いながら、五ヶ山は御手洗の制服のボタンに手をかける。

彼女の言うとおり、御手洗の制服のボタンが取れかけていた。

「ああ、またかあ、しかし、脆いもんだねえ。もう少し頑張れんのかねえ」

「そんだけ胸を張ってりゃ、取れるでしょうに」と五ヶ山は愚痴を零した。

「中学上がってから、急に成長しちゃったからねえ」

そう言いながら、御手洗は胸に手を当てた。制服の上からでもわかったが、相当な大きさである。

「人に見せびらかすもんでもないでしょ？」冷めた目で五ヶ山が云う。

俺はふと、五ヶ山が御手洗に言っていた言葉を思い出した。

そして、なるほどなと頭の中で呟き、納得する。まあ、目に悪いかどうかは見る人間の見分じゃないのか？

——そんなことを考えているうちに、次の始業チャイムが鳴り響いた。

授業が終わり、何とも言い難い開放感が全身に駆け巡る。

「んっ、ああ〜っ」と……」

俺はゆつくりと背伸びをする。

「ねえ、裕樹くん？ 今日はいくから何か用事とかある？」

俺の机の前までやってきて、五ヶ山がそう尋ねる。

「いや、別に用はないけど？」

それを聞くや、五ヶ山は胸を撫で下ろした。

御手洗の豊満な胸……とまではいかないが、それでも胸が手で押し当てられており、ふくらみが変形している。

「あのね？ まだここにきてからそんなに経ってないでしょ？ だから、この町を少し案内しようかなって」

これって、俗に言うデートの誘いか？と考えたが、

「恵子、町を案内したついでに、買い物につきあわせる気じゃないでしょうね？」と御手洗が五ヶ山に尋ねる。

「別にそんなつもりじゃないけど…… そりゃ、スーパーのタイムセールで、卵1パック79円お一人様ひとつ限りに付き合ってもらおうとかそんな気は」

最後の方は殆ど小言で、ハッキリとは聞き取れなかったが、ようするに最終的にはそれに付き合ってほしいという魂胆であろう。

「当然、湊も一緒にね」と五ヶ山が言うや、御手洗は顔を歪めて「はあっ？」と驚いた声を挙げる。が、五ヶ山が上目遣いで御手洗を見詰めるや、

「はあ、わかったわよ。一緒に行けばいいんでしょ？ 行けば」  
御手洗は五ヶ山から目を逸らす。「んふふつ、これだから湊は可愛いだ」

五ヶ山にそう云われ、御手洗の顔が少しばかり赤くなった。  
こいつ、スタイルはいいが、結構初心うぶなのかもしれない。

俺と五ヶ山、御手洗が上履きから靴に履き替え、校舎から出ようとした時、うしろから「先輩、今帰りですか？」となにやら明るい声が聞こえたので、そちらに振り返ると、

「あら？ 渚に千恵じゃない？ これから部活？」

「はい。今度試合があるので、連日応援の練習なんです」  
俺たちに声をかけてきたのは下級生の二人であつた。

小柄な方が生家渚ゆぐえなぎさ。身長はざっと見繕つて百五十あるかないくらい。五ヶ山や御手洗と一緒に話をしてるのをよく見かける。

「もうちびつとうちらが頑張れへんと、応援してるチームが勝てへんって、先生から言われとるんよ」と、京都弁みたいな言葉で話しているのが酒殿千恵さかど ちえ。身長は生家と変わらないが、ストレートパーマが何ともかわいらしい。

京都弁を話しているというイメージからか、着物とか似合いそうだよなあと勝手に想像してみたりする。

「そっか、もうすぐ野球部の試合があるもんね」  
五ヶ山がそう言うや、生家と酒殿は頷いた。

「ほして、皆はんはどこにいきますん？」

「ああ、五ヶ山の提案でな。俺に町を案内してくれるらしい」  
俺は酒殿の質問に答えた。

「町をですか…… そらまた楽しい事で、うちも一緒に行きたかったんやけど……」

そう言いながら、酒殿は生家を一瞥する。

「まあ、試合がありますから、私と千恵は落ち着くまで遠慮しておきます」

一応断っておくが、まだ誘うとは云ってない。

「そうか、残念だったなあ…… この前美味しいケーキがある店見つけたんだけど」

御手洗の言葉に、生家が耳を傾ける。漫画的表現だったら、耳をピクつかせるといったほうがわかりやすいか？

「しかもそのお店、和菓子も豊富で、蜜豆なんかもあったりで」  
今度は酒殿の耳がピクつく。

「でも、二人とも来てくれないんだねえ。お姉さん悲しいよ、しかたないよねえ、大事な試合の前で、こんな力ロリーの高い、料理は食べられないよねえ」

御手洗が残念そうに云う。

「わ、私と千恵は今試合に向けて、支えてくれる人に負担がかからないようダイエットもしてますからね」

生家がそういう。どこをどう見ても強がっているとは思えない。  
結局、生家と酒殿は練習があるため、参加しなかった。

校舎から出ると、潮の香りが鼻を<sup>くすぐ</sup>ってきた。俺の通っている鳴濱中学は海沿いにあり、教室にいた時も、潮の香りはしていたが、外に出るとその香りはいつそう強く感じられる。

「んんっ、なんか泳ぎたくなってくるな」

俺がそう言うや、五ヶ山が「それはまだいいんじゃないかな？

まだ五月だし」と云う。

俺は潮の匂いをかいたからそう思っただけで、実際に泳ぎに行くとは思っていない。

しかし、五ヶ山と御手洗、そしてさっきの二人（生家と酒殿）を誘って海に行くのもまたいいかもしれない。

——いや、<sup>やま</sup>疚しい気持ちがあつてではない。一応……

「それじゃ、どこに行こうか？」

五ヶ山に促され、俺は御手洗を見やる。

「そうだね、やっぱりあそこはどうかね？」

「あそこ？ そうだね。やっぱりあそこは行かないと」

「——『あそこ』ってなんだよ？」

俺がそう尋ねると、二人は互いを見るや「行ってみてのお楽しみ」と云い、歩き出した。

俺は少し疑問に持ちながらも、二人の後をついていった。

校門を出ると、左側からパトカーがサイレンを鳴らしながら走っていくのが目に入った。

「裕樹くん、どうかしたの？」

五ヶ山にそう云われ、俺は二人に追いついた。二人に町を案内されながら、いつしかパトカーのことなんて忘れていた。

歩いているうちに、いつしか俺と五ヶ山、御手洗の三人は海沿いの小さな丘へとやってきた。

どうやらこの先に、二人が俺に見せようと思っているものがあるらしい。

海に近いせいか、潮の香りが学校にいたときよりも強く匂ってくる。

「裕樹くん。どうかした？」

五ヶ山がそう俺に尋ねる。

「二人が見せたいのってなんだよ？ 見たところ何もねえけど？」

俺は周りを一瞥しながら言った。目の前に海が広がっているのはわかるが、それ以外は特に目移りするものは何もなかった。

「あそこ。ほら、あの岩肌に小さな祠があるでしょ？」

五ヶ山は俺に教えるように、崖下を指差した。彼女の言う通り、岸壁に洞穴があり、そこには小さな祠らしきものがある。

——あれが一体なんなのだろうか？

「あれはね。哭沢女神なきさわめのかみっていう神様が祭られているんだって」

——誰だそれ？

「哭沢女神は伊邪那美いざなみが火之迦具土神ほのかぐつちのかみを生んだ際に、陰部ほとを焼き、死んでしまったの。それを嘆き悲しんだ夫である伊邪那岐いざなぎの涙から生まれたと言われている」

五ヶ山はそう話すが、俺にはさっぱりわからなかった。

「二人が俺に見せたいのってそれだったのか？」と俺は確認するよ  
うに尋ねる。

「うーん、それもあるんだけど、やっぱりこの町の風習みたいな事  
も教えておいた方がいいかなと思って」

——風習？ しきたりかなんかか？ あそこに近付いてはいけな  
いとか……

俺は五ヶ山に教えてもらった祠を見た。

俺たちが建っている場所から百メートルほど離れた岸壁に、まる  
で体長二メートルはあるかもしれない怪鳥が入れるくらいの大きい  
穴の中に祠が建てられている。

余り人が入らないのか、そもそも人が入れるのかと言いたくなる  
くらいの絶壁にあり、しかも、波がギリギリのところまで上がって

いる。

これじゃ風が強い日なんて、すぐに波にさらわれて、壊れるのがオチじゃないのか？

俺がそのことについて尋ねると「ああ、大丈夫よ。あの祠は壊れないから」と御手洗は云った。祠が流されないように頑丈な造りになっているのだろうか？

そのことも尋ねたが、それに関しては二人とも知らないようだ。

そもそもあの祠が建てられたのはなんと百年以上前のことで、それから一度も波にさらわれて壊れたことはなかったと言われているらしい。

「これ以上見るもんもないなあ……」と俺が息を吐くと、

「それじゃそろそろ行こうか？ 恵子、帰りに買い物行くんでしょ？」

御手洗がそう尋ねると、五ヶ山は頷く。

「そう云えば、教室で言ってたな。『タイムセール。卵1パック79円お一人様ひとつ限り』だっけ？ 三人で行けば3パックか？ 急がねえとやばいんじゃないか？」

俺がそう云うと、五ヶ山は腕時計を見やる。

「うん。後20分で始まるから、早く行かないと」

五ヶ山を筆頭に俺と御手洗の三人は、急ぎスーパーへと駆け出していった。

その道中、またパトカーがサイレンを鳴らしながら走っているのを見かけた。その事で、校門の前を走っていったパトカーのことをふと思い出す。

穏やかな町と思っていたが、一日に二台もパトカーを見てしまうと、この町は穏やかじゃないのかもしれないと思ってしまった。

スーパーにやってきた俺と五ヶ山、御手洗はその雰囲気圧倒されていた。

開始まだ十分前だというのに、すでに小母さんおは連中が卵売り場のところに集まっている。

ワゴンの中に目当ての卵があるのはわかるが、それを囲んでいる。言い方はあれだが、あんたたちは角砂糖に群がる蟻か？

「だ、だいぶ出遅れたみたいだな？」

開始十分前だが、明らかに遅れてきた俺たちに不利な状況である。しかも親子連れが多く、しかも何パック限定という文字も見当たらない。

近くに店員らしい男性が立っており、ジッと時計を見ている。

「このお店のルールだね。おじやっていうのがあるの」

五ヶ山が俺にそういう。『おじや』？

「おは『押さない』。じは『邪魔をしない』。やは『破らない』って意味なの。タイムセールの中にはお菓子の安売りなんてのもあるから。商品の袋が破れたら、定価の倍で買わないといけなくなるの。なるほどだから最後に『破らない』が入るのか。確かに安売りなのに破いてしまったら、定価の倍は取られても仕方がない気がする。

そう云えば、何かのテレビで聞いたことがあるが、万引きした商品は店側からしてみれば、その商品を十個ほど購入してもらえないと、その値段にはならないらしい。

買う前に商品を破かれてしまったては、それは万引き行為にあたる。それを考えたら、定価の倍なんて、良心的な設定じゃないのか？と考えているうちに、五ヶ山と御手洗の姿が見えなくなってしまった。

「裕樹くん！ 早くしないと買えなくなるよ？」

何時の間にか二人は小母さん連中の中に入っていた。

俺は急いで二人のところに駆けつけたとき、丁度笛が鳴り響いたと同時に、地響きが聞こえてきた。

——タイムセールが始まると同時に、俺は肉波に揉まれていくのだった。

「ぜえ、ぜえ」と俺は荒い息を挙げていた。

俺の手には確<sup>しっか</sup>りと卵十個いりのパックが入ったレジ袋が持たされており（というよりいつのまに取ったんだろうか？）、今仕方、会計を済ませたところだった。（この時も殆ど記憶はなかった）

——そう云えばお釣りもらったつけ？ 百円玉を出したところまでは覚えてるんだけど……

「はい。弘樹くん。お釣り。21円」

五ヶ山がそう言いながら、俺に小銭を渡す。十円玉二枚に一円玉一枚。確かに21円だ。

「二人は買えたのか？」

そう尋ねると、二人はレジ袋を見せる。——どうやら変えたようだ。

「それにしてもどうするんだよ？ 卵3パックも……」

「あ、大丈夫。恵子<sup>えこ</sup>の家はケーキ屋で、結構卵使うからね」  
御手洗がそういうが、俺は少しばかり疑問に思った。

「卵とか専門の業者にお願いするんじゃないのか？ 何もこんなスーパーで買わなくても」

「うちはこの町の酪農家をお願いして、卵とか牛乳の提供してもらってるよ。少し離れた丘の方に牛小屋があるの知らない？」

——そういわれても今はじめて知った。

「それにこの店の卵とか牛乳もその酪農家から提供してもらってるんだって」

なるほど同じ酪農家なら、味の品質は変わらないって事か？

「さてと、そろそろ帰ろうか？ そうだ。二人にうちのケーキご馳走するよ」

五ヶ山にそう云われ、俺と御手洗はそれに甘えることにした。

——五ヶ山の家は可愛らしいケーキ屋で、目の前に出されたケーキはまた格別だった。

紅茶も飲んだが、すっきりとした味わいで、ケーキの甘さを邪魔しない。丁度いいものだった。

訊けば、紅茶も店で作っているらしく、味を損なわないようバランスをとっているらしい。

ケーキを頬張りながら、俺は御手洗が言っていた事を思い出した。「なあ？ 確か生家と酒殿に新しいケーキ屋が出来たって云ってなかったっけ？」

俺がそう尋ねると、御手洗は「うん。駅前にね。国内産卵を使用した本格ケーキなんて謳い文句つけてたからどんなもんかと思って食べてみたのよ」

友達がケーキ屋をやっていることもあるためか、御手洗は敵情視察も兼ねて店に入っただらしい。

「それで感想は？」

「全然美味しくなかった」

まるで蔑んだ表情で御手洗は言う。

「——美味しくなかった？」

「いや、味自体は美味しいのよ。申し分ないくらいにね。ただこの

店と違って、全然心から美味しいとは思えなかった」

一体何を云ってるんだろうか？

ただ御手洗は味自体は美味しいといっていたから、それ以外のものがこの店にはあって、駅前にある店にはないと言うことだろう。

「そう云えば、この町にしきたりみたいなものがあるっていつてなかったか？」

「しきたりって、そんな大層なものはないよ。あるとすればひとつだね」

厨房の方からケーキを持ってきた男性が俺の質問に答えた。

彼は五ヶ山の父親らしく、脱サラして今はケーキ屋に勤しんでいるらしい。——確か章平って名前だっけ？

「小父<sup>おじ</sup>さん。今日は砂糖少なめだね？」

「ははは。湊ちゃんには敵わないな。今日は紅茶の出が若干甘かったからね。ちよっと砂糖の量を少なめに設定してみたんだ。さすがに卵や牛乳がもつコクと甘味を変えることは出来ないからね」

章平さんはそう言いながら、俺の目の前にチョコケーキを出した。長方形のケーキにチョコがコーティングされており、その上にはラズベリーが乗せられている。

「今度出そうと思っている新作なんだ。ぜひ感想を頂きたいところだね」

章平さんにそう云われ、俺と御手洗はケーキを頬張るや『美味しい』と声を挙げた。

「小父さん。このケーキ美味しいよ。チョコの苦味が入っている甘いスポンジと調和して、全然気にならない」

確かに御手洗の言う通り、コーティングされたチョコだけを食べると、苦味が強い。おそらくビターチョコだろう。それがスポンジに甘くなっているのか、一緒に食えると全然気にならなくなってくる。

「そうかい？ それじゃこのケーキを店に出してみるよ」

章平さんはそう言いながら、笑みを浮かべながら厨房に戻っている。

「あ、そう云えば、さっき云ってたのって？」

俺が呼び止めると、章平さんは立ち止まり、俺を見る。

「ああ、さっきのやつだね。この町では決して自殺をしてはいけな  
いんだよ。神様が怒ってしまうからね」

章平さんはそう云うと、厨房へと戻っていった。

——自殺？ また物騒な……

そう考えながらも、俺はケーキの美味しさに顔を緩める始末だった。

## 1・汐の町（後書き）

さて、いよいよ本編です。まったりと行きましょう。感想お待ちしております。

## 2・黄泉の国

五ヶ山とはそのまま、彼女の実家兼ケーキ屋で別れ、俺は御手洗とブラブラしていた。

奇遇な事に、彼女とは帰り道が一緒だったのだ。（というより三軒隣のご近所）

「しっかし、五ヶ山<sup>ち</sup>家のケーキ、すんげえ美味<sup>うまい</sup>かったなあ」

「そうでしょ？ でも今日と同じものが出るとは限らないわよ。小父さん、いつも食べる人のことを思って作ってるから」

御手洗がそういう。そう云えば紅茶の味に合わせて、ケーキの甘味とかも調整するとかいってたっけ？

「飲み物ですべてが決まるってか？」

「ううん、その人の体調を見て、コーヒーか紅茶に分けてるんだって」

聞けば、五ヶ山の母親が元看護師で、その場で食べる客には飲み物に工夫をしているらしい。

「もしかして、駅前に出来たケーキ屋より、五ヶ山<sup>ち</sup>家の方が美味しいって——そういう意味か？」

そう尋ねると、御手洗は頷いた。

「なんか人が作ったって感じがしなかったから、そう思っただけ」  
「なんかぶっきらぼうに云われた気がする。まあ、俺自身その店のを食べたわけじゃないけど。」

それだとうして生家と酒殿の二人にはあんな事を云ったんだろ  
うか？ 訊けば五ヶ山の家は和菓子は無いそうだ。

そんなことを話しながら、俺たちは一緒に帰った。

俺は自分の家のドアノブに手をかけ、回し、扉を開いた。

「ただいま」

「おかえりい、お兄ちゃん」

……つと、帰ってきて早々喧<sup>やかま</sup>しいのがきた。

「ただいま、千鶴<sup>ちじろ</sup>。いい子にしてたか？」

俺がそう訊くと、千鶴は「うん」と笑顔で頷きながら答えた。

千鶴は小さい身形のくせに、ソバージュとか、服にうるさいという、お洒落に興味があるのか、そういう年頃なのだろう。（早い気もするけどな）

ただそれは身形だけの話で、実際は素直でいい子だし、友達も男女限らず誰とでもといった感じだった。とはいえ、それは前の学校での話だけだな。

「学校はどうだ？ 友達できたか？」

俺がそう尋ねると「うん。今日なんてね……」と学校であつた事を止め処なく話しはじめた。——で、どこで終わるんだ？ 既に三分くらいは聞いているんだが？

まあ、妹の長話は今に始まったことじゃないし、饒舌なのはいいことだ。

「それでお兄ちゃんはどうして帰りが遅かったの？ もう夕方だよ？」

妹にそう云われ、時計を見る。——午後六時。

点けっ放しになっているテレビからは『五月十三日、火曜日、夕方<sup>夕方</sup>のニュースを……』というアナウンサーの声が聞こえてきた。

「ああ、ちよつと友達に付き合わされてな——そうだ」

俺は五ヶ山ン家で、家族にとケーキを買ってきていたことを思い出し、手に持っていた箱をテーブルの上に乗せた。（章平さんが少し割り引いてくれたお陰もあるが）

妹は興味津々に箱を眺めている。「お兄ちゃん。これなに？ ケーキ？」

全く以て正解。訊けば匂いでわかったらしい。ったく、やっぱり花より団子。色気についてもお子様か？

「あら、裕樹くん。今帰ってきたの？」

俺が帰ってきたことに気付いた母さんが、手を拭きながら台所から出てきた。

年は俺を24くらいで生んでるから、ざっと計算して39くらいになる。

その割には、ヘタすると高校生と間違えられそうなくらいの可愛いらしさがあつた。

「ただいま母さん。——鍋吹き零れそうだけど、いいのか？」

「またまたあ、いくらお母さんがおつちよこちよいでも、人と話するときくらい、火を消してるわよ」

母さんはリアクションをとりながら、笑っている。

「ちよ、ちよっと、お母さん！ 鍋吹き零れてる！」

何時の間にか台所に入っていた妹が、大声で母さん呼んだ。「あらあら、大変。どうしましょ？」——当の本人はのんびりしてて、緊張感の欠片もない。

まあ、妹がすぐに気付いたから、大惨事は免れたようだ。

「えっと、哭沢女神って……」

夕食の途中、父さんが仕事から帰り、俺は五ヶ山と御手洗から聞いた『哭沢女神』のことが気になっていたので、少しばかりネットをさせてもらうことにした。

パソコンは父さんしか持っておらず、しかも許可をもらわないと

使えないし、母さんと妹には触らせようもしない。（まあ、どうしてなのかは俺も薄々とわかってはいるが）

「つと、えーと何々？」

俺はネットのHPに書いてある文字を翼々目で追っていく。

伊邪那岐いざなぎの涙からは生まれたことから。また沢は多に通じ、涙（水）が多く湧き出ることを表す。あるいは泣き女を神格化した。

要するに、妻である伊邪那美いざなみを失ってしまった伊邪那岐が流した涙が、哭沢女神を生み出したって事が——あれ？

俺は一瞬、哭沢女神ではなく、伊邪那美と伊邪那岐について臆気おぼろけな知識が脳裏にうろついた。

——確か伊邪那美いざなみって、死んでないよな？　そう思い、俺は伊邪那美についても調べる事にした。

伊邪那美は天地開闢てんちかいびやくにおいて、神世七代の最後かみのよななよに伊邪那岐とともに生まれた。

国産み・神産みにおいて、伊邪那岐との間に日本国土を形づくる多数の子をもうける。その中には淡路島、隠岐島からはじめ、やがて日本列島を生み、更に山・海など森羅万象の神々を生んだ。

火之迦具土神を産んだために陰部に火傷を負って、病に臥せのちに亡くなるが、その際にも尿や糞や吐瀉物から神々を生んだ。

これは五ヶ山から聞いたことだ。——問題はここからだった。

死後、伊邪那美は、自分に逢いに黄泉国までやってきた伊邪那岐に腐敗した死体《自分》を見られたことに恥をかかされたと大いに怒り、恐怖で逃げる伊邪那岐を追いかける。しかし、黄泉国と葦原中津国（地上）との境である黄泉比良坂よもつひらなかで、伊邪那美に対して伊邪

那岐が大岩で道を塞ぎ、会えなくしてしまう。そして、伊邪那美と伊邪那岐は離縁した。

この後、伊邪那美は黄泉国の主宰神となり、黄泉津大神、道敷大神と呼ばれるようになった。

そうか、俺は伊邪那美が死んだ後に違和感があつたんだ。伊邪那岐は伊邪那美に逢うため、危険を承知に黄泉国にやってきたが、伊邪那美は死体となった自分を見られたことに怒りを覚え、伊邪那岐を追いかけた。

なんか矛盾してないか？——そりゃ、目の前に死体があつたら逃げたくなるのもわかるけどな。確か二人がはじめて産んだ子は出来損ないだって聞いたことがあるが——

【名前の由来】というのが目に入ったので、それを読んでみる。名前の「いざな」は「誘<sup>いざな</sup>う」の意で、「み」は女性を表す語である。と記されている。

もう一度、哭沢女神について調べる。

昔「泣<sup>な</sup>き女<sup>め</sup>」というものがあり、葬儀の時、遺族の代わりに泣くのを生業にしていた女性をそういう。

哭沢女神はそれを神格化したものとも考えられている。

「泣き女」の役割は、主に死者の靈魂を慰撫<sup>いぶ</sup>して、無事にあの世に送るというもの。

それと同時に招魂（魂の呼び返し）の呪術としての儀式性もあった。

そこから魂を活性化させ、寿命をつかさどる神としての信仰もあったと考えられているらしい。

哭沢女神の神は水の神と云われているから、なるほど、あそこに祠が建てられていたのも納得がいく。

「おおい、裕樹？ そろそろ父さん仕事がしたいんだがなあ？」  
ソファに座っていた父さんがそう俺に促す。

俺は観覧履歴を消去する。（互いに何を見たのかを調べないよう  
にというルールだ）

「ああ、ごめん父さん。パソコンありがとう」

俺は椅子からおり、父さんに礼を言う。

「しかし、お前が調べたいって云うから、てっきりゲームの新作でも出たのかと思ったがな？」

「俺、一応今年は受験生だぜ？ さすがに今は自粛モードだよ」

俺は笑いながら言った。

「勉強の休憩にちよつとだけがいつしか何時間につて事にはならないようにな」

父さんは笑いながら言う。全く以て正解。——つてそれは父さん  
もだろ？

「そういえばお前、牛頸静江<sup>うしくび しずえ</sup>つて生徒知ってるか？」

突然そう尋ねられ、俺は首を横に振った。「いや、聞いたことねえけど？」

「そうか。お前のクラスメイトつて聞いたんだかな」

父さんは残念そうに項垂<sup>うなだ</sup>れた。まだ引つ越して一週間くらいしか経つてねえのに、クラスメイト全員の名前なんてまだ覚えきれてない。

「それがどうかしたのか？ その——牛頸静江さんだっけ？」

「ああ。父さんたちが引つ越してきた三日前から行方不明らしくてな。確か、今日で十日になるらしい」

十日も行方不明なら、プチ家出ではなさそうだ。

「それで、どうして父さんがそんなこと俺に訊くんだよ？」

「ああ。父さんの会社の社員が噂してたんでな。お前のクラスだっ

てもそこで知った」

なるほどと思うと同時に、俺たち家族が引っ越してくる三日前から行方不明か…… 偶然だよな？

俺は気になりながらも、眠くなってきたので、自分の部屋に戻る事にした。

——ベッドによこたわるとそのまま眠りについた。

### 3・腐食

——変な夢を見た。

女の子が誰かに虐げられている夢。見るに耐えられない悲惨な夢。

どうやらそこは教室のようだ。

どうして曖昧なのか、そこが真っ暗で、机ひとつに女の子が座っており、彼女を数人が囲んでいる。だから、ここが教室なのだった。

女の子はジッとそこに座っている。微動だにしない。

誰かが紙コップを持ってくるや、それを女の子に被せた。

——中身は泥だった。いや、腐った糞尿……

女の子はそれをかけられても、ジッとそこに座っている。逃げようともしない。

——やめろ。

と、俺は声を出した。出したはずなのに、目の前にいるやつらには聞こえていない。

いや、俺は本当に声を出したのか？

今度は鋏で女の子の髪の毛を切っていく。彼女のスラッとした長い髪が、短く切られていく。すると、女の子の小さな悲鳴が聞こえた。

「あらあ、ごめんなさい。痛かった？」

謝ってはいるが、どこがだよ？ 全然悪びれてねえじゃねえか？ 女の子の耳が切れてしまい、そこから血が滲み出ていた。

「そっついえば聞いた？ この前、生徒会長の田富たじみくんとこの子が話

してるところを見たって子がいてねえ？」

「聞いた聞いた。ったく、冗談じゃないわよね？ 生徒会長となんて話せるわけないのに」

ケラケラと晒<sup>わら</sup>いながら、一人が女の子の髪の毛を掴み挙げる。

「あんた、この前も先生に媚売ってたわね？ 気持ち悪いのよ。全然可愛くもないくせに、ああ惨め、惨め過ぎて泣けちゃうわ」

そう言いながら、女の子の顔を机に叩きつける。

「なによ？ 何よその目は？ ほら、\*\*\*っ！ あんた家から持ってきたんでしょ？ あれ出さないよ」

そう叫ぶや、誰かが卵のパックを持つてくる。

「それ、何日ほったらかしにしてたの？」

「2週間くらい。外で——」

そう言うや、「うわ、酷い。でもこいつにはお似合いかもねえ？」と微笑する。

外で二週間だと？ それって腐ってるって事じゃねえか？

一人が卵を女の子の頭の上で割る。落ちた黄身はグチャリとつぶれ、女の子の髪の毛にこびりつく。

「ほら、まだあるでしょ？ 大丈夫よ。こいつ——言い返せないんだから」

恐らくリーダー格であろう、女子生徒が高笑いするように告げた。

——どうしてそう言い切れるんだよ？ ってか、どうして言い返さないんだよ？

俺は何も出来ないでいた。——あの時と同じだとそう思ったのか、自分でもわからなかった。

「牛頸なんて名前がいけないのよ」

——うしくび？

「そういえば、こいつのお父さん——自殺したんだって、あそこで自殺したんだってさあ？」

「あそこって、もしかしてあの祠があるところ？ そいつも馬鹿だねえ？ あそこは飛び込んだじゃいけないんじゃない？ 神様が怒るとか何とかって」

一人が笑う。それに釣られて、他のやつらも晒っている。わらっていないのは机に座っている女の子だけだった。

「まあ、いいんじゃないの。余所者<sup>よそももの</sup>だし」

なんで人が死んでるのに、そんなに晒えるんだよ？

ふと、女の子——牛頸という女の子が俺を見た。

彼女は笑った。それは屈託のない笑顔だった。

俺は目を覚ました。頭がぼーとしていて、まだ覚醒はしていない。辺りを見渡した。何ら変わらない自分の部屋だった。

——なんであんな夢見たんだろうな……と思いながら、俺はベッドから立ち上がった。

——うしくび…… 牛頸。

確かにあの夢で、そんな事云ってたな。でも、どうしてあんな夢を見たんだ？

「っそ！」俺は天井に吊るしたサンドパックに蹴りを入れる。ギシギシと天井がしなる音が聞こえた。

「ちよっとお兄ちゃん？ 朝からうるさいよ！」

隣の部屋から妹の声が聞こえた。

「ああ、ごめん。ちよっとな変な夢見てな。ムシャクシャしてたところだったんだ」

「そうなの？ でも変な気起こさないでよ？」

妹が心配してくれているのはわかったが、夢の内容は話さないでおこう。

——古傷を痛めるようなもんだからな。

「あら、おはよう裕樹くん、千鶴」

朝食の準備をしていた母さんが俺と妹に挨拶をする。

「おはよう、母さん」「おはよう、お母さん」

テーブルを見やると、父さんが既に座っており、コーヒを片手に、新聞を読んでいる。

「父さんおはよう」

「おう裕樹、千鶴おはよう」

父さんは目線を新聞に向けながら、挨拶をする。

「裕樹、余り揺らすな。近所迷惑になる」

「ああ、ごめん。気をつけるよ」

俺が謝ると、父さんは「そうか。ならいいんだ」とそれ以上の事は訊かなかった。

学校へと行く途中、御手洗が家から出てきたのが見えた。

「おーい、御手洗！」

「あ、裕樹くん。おはよう」

御手洗はそういうや、俺より二、三步先で歩き始めた。

「あのさあ？ ひとつ訊きたい事があるんだけど」

俺が声をかけると、御手洗は少し振り返り「何？」と聞き返す。

俺は昨日、父さんから尋ねられた事を御手洗に尋ねた。

「牛頸つて人、知らねえか？」

そう尋ねると、御手洗は一瞬立ち止まり、「知らない……」と告げた。

「そ、そうか？　なんか父さんが俺のクラスメイトとか云ってたけど、まだ全員の名前覚えきれてないからさ」

俺は笑いながら云う。

「そっか。でもうちのクラスに「牛頸」なんて人いないわよ？」

御手洗は屈託のない表情を浮かべた。

でも俺には、どこかぎこちないその笑みに違和感を持っていた。

学校に着き、教室に入る。

それから何事もなく、授業は進められていく。

休み時間、五ヶ山に牛頸という生徒の事を尋ねようと思ったが、いそいそと何処かに出て行ってしまう。戻ってくるのは大抵授業が始まるくらいの時だった。

——昼休み。俺は構内をブラブラしていた。

三年生という事もあるのか、一年生側の廊下を歩いていると、あちらこちらから声が聞こえてくる。

「あらあ？　先輩やないおすかあ？」

「あれ、酒殿さん？」

教室から声をかけられ、俺はそちらに振り向くと、教室の窓から酒殿千恵が身を乗り出していたのが目に入った。

「なにしていますん？　こんなところで」

「んっ？　ちよっとな。学校のことを色々見て廻ろうと思ってさ」  
俺がそう云うと、酒殿は教室の扉から廊下へと出てくる。

「なんならうちが案内したけよっか？」

「いいのか？」

「まあ、うちかて、まだ一年やさかい、あんまり校舎ん中知らへん

けどな」

俺は酒殿と校舎を歩くことにした。

「はい、わかりました。それでは失礼します」

そう言いながら、職員室から男子生徒が一人出てきたのが見えた。

「裕樹はん。あれがこの学校の生徒会長をしてはる、田富さん」

俺はその名を聞くや、田富に近付いた。

「あ、あのすみません。ちょっと尋ねてもいいですか？」

突然そう云われ、田富は驚きを隠せないでいた。

「え、えっと…… きみは？」

「塔原裕樹といいます。ちょっと訊きたい事があるんです」

そう云われ、田富は少し躊躇うような仕草をしたが、

「わかった。ここではあれだ。少し中庭に出ようか？」

俺はそう云われ、頷いた。

田富が中庭へと案内してくれた。俺と酒殿はそれについていく。

中庭には他にもちらほらと生徒が屯している。

「それで、僕に訊きたい事ってなんだい？」

草が生えている地面に座り、田富は見上げるように俺に尋ねた。

「牛頸って生徒をご存知ですか？」

俺がそう訊くや、田富は表情を暗くした。

「一体どこでその名を？」

「父さんが仕事場で、その牛頸…… 牛頸静江っていう生徒が十日以上行方不明だって云う噂を聞いたって」

俺は隠す事無く言った。

「噂か…… 噂で済むなら、まだいいんだけどね」

田富はそう言いながら、顔を俯かせた。

——どういう意味だ？　噂で済むならって……

「君はこの学校にきて何日になる？」

「えっと、一週間くらいになります」

同級生なのに敬語になつてしまつのは、相手が生徒会長だからだろうか？

「僕は彼女が行方不明になる二日前、彼女が廊下で怪我をしていたのを看護したんだ」

田富は思い出すように言う。

「それから二日後、彼女は行方不明になった。彼女の母親は探していたよ。そりゃそうさ。たった一人の娘らしいからね。でも彼女は見つからなかったんだ」

「それ、うちも聞いたことがあります。だけど見つかったって酒殿がそう尋ねると、田富はコクリと頷いた。

——なんだ。見つかつてるんじゃないか……

「見つかったのは……　彼女が履いていた靴だけだった」

田富が小さく呟いた。

「ど、どういふことだよ？　それじゃ自殺つて事じゃねえのか？」

「僕も君と同じ考えだったよ。それを聞いたときはね。でも、それしか見つからなかったんだ」

——見つからなかったって、どういう……

「見つかったのは牛頸さんの靴だけ。遺書は見つかっていない。それどころか、遺体すらまだ見つかっていないんだ」

「さ、探そうとかしなかったんですか？」

「彼女の母親はしただろう。けど、この町の人たちは手をかそうとしなかった」

「なんで？　だって人一人死んでるかもしれねえんだぜ？」

俺が怒鳴ると、周りから視線を感じた。

「なあに、あの人？ 田富さんにあんな乱暴な言葉」

俺は女子生徒を一瞥する。

「まあこわい。あんな目して、一体何を食べたらあんなふうになるのかしら？」

俺は少々馬鹿にされても怒らない平常心を持っているので、それ以上は無視することにした。

「すまないね。彼女たちを許してやってくれ」

「別にあんたが謝ることあねえだろ？」

俺がそう云うと「そうだね」と田富は小さく笑った。

「でも、どうして誰も遺体を捜さなかったんだ？」

「君は哭沢女神が祭られている祠を知っているかい？」

そう尋ねられ、俺は頷いた。知ってる何も、昨日そこに行ってきたばかりだ。

「彼女はそこから飛び降りたんだ」

それを聞くと、俺と酒殿は絶句した。

「でも、どうして探そうとしないんだよ？ 普通、探すだろ？」

「君の言う通りだけど、この町の風習でね。葬儀を終えた後、遺体をあの崖から落とすんだ」

——それって死体遺棄になるんじゃない？

俺の考えがわかったのか、田富は頷く。

「確かに君が思ったとおり、それは法律では赦されていない。でも、遺体といったって、焼却した白骨なんだ。白骨を海に流すなんていう風習は、この町に限った事じゃないんだよ」

聞けば、それを「水葬」といい、この町みたいに海沿いの地域では、よくみられる風習のようだ。

「つまり、法律上それは赦されているって事なん？」

酒殿がそう尋ねると、田富は頷いた。

「だけど、それは葬儀を終え、白骨となった遺体としてだ。死体遺棄は決して赦されていない。ただ、あの崖から落とすのは、哭沢女神がその遺体を哀れんでくれると信じられているからだね」  
それは奇しくも、昨日調べたとおりだった。

「それじゃ、逆にあそこで自殺したら？」

「彼女は嘆くだろうね。どうして自ら身を滅ぼすのかって、その体は自分だけのものではないのに……と」

—— 一体どういう意味なんだろうか？

そんなことを考えているうちに、チャイムが鳴った。

「おっと、もう昼休みも終わりか…… すまないね。そろそろ失礼するよ」

そう言いながら、田富は立ち上がり、ズボンについた埃を掃<sup>はら</sup>うと、俺と酒殿を見やる。

「君は一年生だね。一年生は三階だから、早くしたほうがいい」  
そう云われ、酒殿は頷いた。

「それじゃ塔原くんだっけ？ 僕はこれで失礼するよ」

田富は会釈すると、そのまま校舎へと去っていった。

「うちらも、はよう戻りましよ」

酒殿にそう云われ、俺は酒殿を教室まで送り、自分の教室へと戻った。

### 3・腐食（後書き）

ところで、学校における学年の教室がある場所ですが、一年生は三階、二、三年生は二階というのは、私が通っていた学校がそうだったんですが、そのまま使わせていただきました。

#### 4・眩暈

酒殿を一年棟の教室に送り、俺は自分の教室へと戻った。

教室に入るや、横から誰かの溜め息が聞こえ、俺はそちらへと一瞥する。

五ヶ山が頼杖をしながら、深い溜め息。

憂鬱そうなその表情は昼休みに入るまではなかったもので、その間にあつたのだろうか？

っと思えば、今度は御手洗が溜め息を吐く。

「な、何があつたんだ？」

俺はそう五ヶ山に尋ねると、

「あ、ちよつとね。図書室で勉強してたんだけど、全然頭の中に入らなくてさ？」

そう言いながら、五ヶ山はもう一度溜め息を吐いた。

勉強かあ、俺も好い加減やんなきゃなあ。それよりも先ず仏語だな。

聞けば、御手洗も一緒に勉強していたらしく、彼女も余り頭に入らなかったという。

昼休み全部を使つて、なんとも勿体無い話である。

「おらあ、おまえらあ、席につけえ！」

ドアの方から、数学教師——関口の荒々しい声が聞こえ、席についていない生徒（俺も含んで）たちは慌てて席に着き始める。

俺は机から教科書を取り出していた時だった。

ガタンという大きな音が聞こえ、全員がそちらを見た。

五ヶ山の机が引つ繰り返っており、五ヶ山は呆然と立ち尽くしている。

「おい。五ヶ山？ どうし……ぐっ??」

関口先生が五ヶ山に声をかけた途端、口を押さえる。

「うげえ？ なんだよ、これえ？」

「なあにい？ このにおい？」

五ヶ山の周りにある机に座っている生徒が立て続けに彼女から離れていく。

俺は席がうしろの方だったので、あまりわからなかったが、何か酸っぱい臭いがする。

「おい？ 一体何が？」

俺は気になつて席を立ち、五ヶ山に近付くと——臭いは強くなり、その正体がわかった。

「な、なんだよ？ これ——」

俺は誰に聞いているわけでもなかった。もちろんそうになっている五ヶ山でさえ答えられなかった。

五ヶ山の手と教科書から硫黄の臭いがし、彼女の手には変色し、ドロドロになった黄身がこびりついている。——それが腐った卵だとわかるのにさほど時間はかからなかった。

「誰?? 誰がこんなことしたの？」

御手洗がそう叫ぶが、誰も答えない。俺は昼休み中庭で田富という生徒会長から牛頸静江の事を聞いていたから、教室にはいなかった。

それは五ヶ山と御手洗も一緒に、彼女二人は図書室で勉強していたと云っていた。

（自分の机にそんなことしないよなあと、考え直したのは云うまでもないが）

そうになると、誰が五ヶ山の机に腐った卵を…… いやまてよ？

五ヶ山の机はドアから一番近い場所にある。教室の窓からでも十分入れられるだろう。

（以前、五ヶ山が生家と窓を挟んで話していたのを難解も見ているしな）

しかし、それが不自然なんだ。腐った卵だぞ？ そんなもん学校に持ってくるか？

それに母さんから聞いた話だが、実は以外にも卵は腐り難いそう  
だ。

殻に守られた正常な卵は、一カ月や二カ月では腐らないそうだし、それを割って。生卵を食べた人が中毒になったという話も実は皆無らしい。（それでも加熱した卵は夏だと半日放置で腐るらしいが）生の卵の方が安全とはこれ如何に感じてもらうけど……  
まあ、結局食べてしまうから、腐った卵なんてあまりお目にかかれないけど。

そうになると、あの夢に出てきた卵は、外に放置していたらしいから腐っていることになる。

それと同様なのだろうか？

「ううぐうつ？」

奇妙な音が聞こえ、音がした方を見ると、五ヶ山が口を押さえながら、慌てて女子トイレへと走っていく。

五ヶ山がトイレで何をしていたのか、云わなくてもいいだろう？（俺だってあまり想像したくないが）

「ちょ、ちよつと？ なによこれ？」

五ヶ山の机を見た女子生徒が、中を覗くや声を荒げる。

机の中には割れた卵の殻が、まるで投げ付けられたかのように、殻ごと入っていたのだ。

それに中に入った教科書にも、卵はこびりついていた。

「あ、恵子…… 大丈夫？」

御手洗が戻ってきた五ヶ山に声をかける。五ヶ山は口をハンカチでおさえており、顔は青褪めたままだった。

「保険委員、五ヶ山を保健室まで連れて行ってやってくれ」

関口先生がそういうや、慌てて保険委員の女子生徒が、五ヶ山を保健室へと連れて行ってくれた。

「おらあつ！ みんな席につけ！ 授業再開するぞ」

そう云われ、残された俺たちは授業を進めていった。

授業の途中、五ヶ山を保健室に連れていった女子生徒が戻ってきた。

授業が終わると、五ヶ山の机は何処かに運び込まれた。（どうやら洗淨、消毒するためらしい）

「裕樹くん？ ちょっと付き合ってくれない？」

最後の授業が終わり（結局五ヶ山はその間戻ってこなかった）、御手洗が俺の机の前までやってくるや声をかける。

「付き合うつて、どこに……？」

「恵子のところ」

五ヶ山のところか、ちょっと気にはなっているし、見には行きたいが――

「迷惑じゃないか？」

俺がそう尋ねると、御手洗は少し考える。

「うん、やっぱり迷惑」

――あらら。

「けど理由をつければいいんじゃないかな？　ちよつと気持ち悪くなったとかいって」

御手洗が滅茶苦茶なことを言う。

「わあたよ。ついていく」

俺は気が乗らないが、御手洗と一緒に保健室に行く事にした。

保健室に入るとカーテンで囲んだベッドが三つ並んでおり、そのひとつに五ヶ山が眠っていた。

「あら、患者さん？」

保険の柏原先生（超美人）が俺と御手洗に声をかける。

まだ二十代と若く、白衣の下にはチューブトップを着ている。胸のところにちよつと切れ込みが入っており、胸の谷間が見えなくなかった。

「あ、いや、ちよつと友達の様子を見にきただけで」

俺はあたふたとし、言動が可笑しくなっている。

「そう。余り他の生徒に迷惑かけないようにね」

そう云うと、柏原先生は俺の方ではなく、外側の窓に目をやった。

（げっ？）

俺は窓に張り付いている男子生徒の多さにドン引きした。

お前らはあれか？　光にあつまる虫か？　差し詰めその光は柏原先生なんだろうけど。

そう考えていると、柏原先生はキュツ、キュツと靴音を鳴らしながら、窓へと歩み寄る。

近付くたびに男子生徒の歓声が聞こえる。

『\*\*\*\*\*』

柏原先生は男子生徒を見るや、笑みを零し、親指を立て、下ろした。

そして間髪いれずにカーテンを閉めた。

「柏原先生、男子生徒に人気あるんだけど、性格ブスでね」  
御手洗が俺に耳打ちをする。

「あらあ？ 二人で何を話してるのかしらあ？」

柏原先生に声をかけられ、俺と御手洗は咳払いをした時だった。

「湊？ それに裕樹くんも」

何時の間にか目を覚ましていた五ヶ山が、俺と御手洗に気付く。

「あ、恵子、気分大丈夫？」

「う、うん。もう……大丈夫」

五ヶ山は体を起こした時だった。

前も俺はそんな状況に出くわした事がある。

「なあ、ひとつ訊いていいかな？」

俺がそう五ヶ山に言っていると、彼女は俺を見た。

「——なに？」

「牛頸静江って生徒知らないか？」

そう尋ねると、五ヶ山は青褪めた表情を浮かべる。

「裕樹くん？ まだそんな事訊いてるの？ うちのクラスに牛頸なんて」

「……いたんだな？」

俺がそう云うと、五ヶ山と御手洗は青褪めた表情を浮かべる。

「どうして、どうしてそんな事知ろうとしてるの？」

御手洗が最もらしい事を言う。俺だってどうしてそんなことを気にしてるんだろうか……

「そ、そうだな。俺どうかし——」

「私のせいだ……」

五ヶ山が讒言のように声を発した。

「——五ヶ山？」

「あの時、私があんなことしたから、私たちがあんなことをしたから」

五ヶ山の肩は震えており、タオルジャケットを掴んでいる手も震えていた。

「恵子？ それは関係ないじゃない？」

御手洗がそう云うと、

「でもあの卵…… 私が牛頸さんにしたのと一緒にだったもの！」  
五ヶ山ははつきりとそういきる。

それは自分が牛頸をいじめていたと自ら自白したのと一緒にだった。

「た、たまたまそう思っただけでしょ？」

御手洗は五ヶ山の背中を優しく撫でながら、

「ごめん、裕樹くん。今日は一人で帰ってくれない？」

別に構わないが、なんか釈然としない。

俺は保健室を後にし、下駄箱で靴を履こうとした時だった。

「んぐうつ？」

突然吐き気を催し、その場に跪いた。——が、その苦しみはすぐにひいていく。

まったく、昔の事で、もう気持ちはこの学校に切り替えてるはずなのに、やっぱり体は覚えてるんだな……

## 5・空席

外に出ると、潮の香りが一段と強くなるのは前にも話したが、前の学校にはこんな体験は殆どなかった。あつたとすれば、排気ガスの嫌な臭いしかなかった。

「フレ、フレ、や・きゅ・ー・ぶ！」

グラウンドの方から、威勢のいい張りのある声が聞こえ、そちらに耳を傾ける。

どうやらチアリーディング部が応援の練習をしているようだ。そういえば、生家と酒殿がチアリーディング部に入ってるんだっけ？俺は気晴らしにチアリーディング部の練習を見に行くことにした。

近くに来てから、ふと思い出す。そういえば、生徒用の下駄箱はグラウンドとは正反対の場所にあるんだっけ？

そうになると、あの声はけっこう大きな声で出していた事になる。

そう思ったのも束の間――

「ほらあ！一年！声が出てなあああい！もっとお腹から声を出すう！」

二年生の生家が、一年生（その中には酒殿の姿もあった）に声出しを教えていた。

生家は制服を着ており、腰に手を当て、反るように声を張り上げている。

『フレエーツ！フレエーツ！や・きゅーぶ！』

俺はふと思ったことがあった。傍から見たら、チアリーディングというより、応援団といった感じだ。

「あら、塔原くんじゃない？どうしたの？こんなところで」

うしろから声をかけられ、俺は振り向いた。

声をかけてきたのは、同じクラスの高平<sup>たかひら</sup>だった。彼女はチアリーディングのユニフォームを着ている。

「もしかして、私たちの練習見に来たの？」

彼女はそう言いながら、水筒のお茶を飲んでいる。

「いや、ちよつと元気な声が聞こえたからね」

俺は素直にそういった。

「そっか。やっぱりチアリーディングって、名前は違っても応援団と一緒にからね。私たちの応援が頑張っている選手たちの後押しになればいいなって——ほらあ、フォーム乱れてる！ そんなことじや下の人に負担がかかるでしょうがあっ！」

突然大声を張り上げる。隣にいた俺は余りの大きさに耳を塞いでいた。

——後で聞いた話だが、高平はチアリーディング部の部長らしい。

「ほら、タイミングがあってない。リズムを取る。相手との息を合わせて！」

「はいっ！」

「はいくらい誰でもいえる！ わかってるなら行動で示さない！」  
俺は華やかな舞台にも、厳しいものを見た。

それから一時間、チアリーディング部の練習は続いていった。

「はい。今日の練習はここまで、一年はまだ声が十分出でないし、基礎体力も出来てない。ユニフォームが着れるなんて思わないこと！」

高平がそういうが、疲れきっている一年はグタツとしており、聞く耳を持っていなかった。

チアリーディング部は練習を終え、部員は解散していく。

「えろうつかれたわあ」

ベンチに座っている酒殿が体操服の襟元をパタパタとさせている。  
「遠くの人に聞こえるくらいにならないとね？ あれじゃ、グラウンドの三分の一くらいしか聞こえないわよ？」

生家がそういうと「そら、けつたいなことや。うちそんなに声でえへんの、渾しいとるやるも？」と頬を膨らませる。

「二人ともお疲れ」

俺は二人に声をかけるや、生家と酒殿は振り向き、俺の方を見た。

「あれ？ 塔原先輩？ 何してるんですか？」

「いや、チアリーディング部の声が聞こえてね。生家さん、凄いじゃないか。一年生に教えているんだから」

「そうですか？ 千恵たち一年生を教えている立場ですけど、私だってまだまだですよ」

そつえば、生家も体操服を着ている。

「ユニフォームが着れる人は二年生からで、しかもテストに合格しないと駄目なんですよ」

「人が多いから捌ける意味もあるそうやしな」

なるほど…… と思いながらも、やはり人気がある部活なのだろう。部員も二十人をゆうに超えていた気がする。

「塔原先輩？ 四月の時、一年生が何人いたか知ってます？」

生家にそう声をかけられ、俺は首を横に振る。

「うちが最初に入ったときは、確か20人位おつたんやけどなあ、今じゃ5人しかおらせえへんのやあ。なんでやろうな？」

酒殿は不思議そうな表情を浮かべながら、首を傾げる。

俺は直接体験していないのはつきりとはわからないが、要するにこの厳しい練習についていけなくなつたのだろう。

「まあ、千恵は日本舞踊や茶道に華道と、家が厳しいですから、こいつのには慣れているんですけどね」

酒殿にとっては、厳しいことに関して体が慣れているということ

か。

「でも、やっぱり声でえへんわ。すぐ喉カラカラになってまう」

酒殿はそう言いながら、水筒のお茶を飲んでいる。

「大丈夫よ。私だって一年のときは、殆ど声出しと基礎練習だけだったし」

生家は俺のほうを見る。「そういえば、塔原先輩は何か私たちに用があるんですか？」

「あ、そうだった。生家さん？ 確か五ヶ山や御手洗とは仲が良かったよな？」

「え、あ、はい。千恵もそうですけど、私たち四人は同じ小学校からの上がりですから」

つまり俺が思った以上に、五ヶ山たち四人の付き合いは長いって事か？

「そのさ？ 五ヶ山と御手洗のクラスに牛頸って人がいたらしんだけど、知らないか？」

俺がそう尋ねると、生家は首を傾げる。

「確か、塔原先輩も同じクラスじゃなかったですか？」

まあ、そう聞き返したくもなるだろうが、知らないのだから訊いているのだ。

「実はさ、ちょっと気になることがあって、その人の事を調べてるんだけど、五ヶ山と御手洗が何か隠してるんじゃないかと思ってね。二人に訊いても、曖昧に返事されるし」

「隠しているんじゃないくて、言えないんですよ。恵子さんと湊さん

――」

生家はあたりを見渡す。俺と酒殿は何事かと首を傾げた。

「まだ、私が一年の時ですけど、牛頸さんを恵子さんや湊さんを含んだ数人が、体育館裏に連れて行くのを目撃したんです」

生家はそれ以上のことは関わろうとはしなかったらしいが、牛頸

は三年になつてから、あまり学校に来なくなつたという。

「それと、その中にいた上八じやちやうっていう人が主犯じゃないかって、あくまで噂なんですけど」

「ありがとう。もう遅いだろうし、明日その上八じやちやうって人を探してみよ」

俺がそう云うと、二人はキョトンとする。

「何言うてはりますん？ 上八はん、先輩と同じクラスやないん？」  
酒殿にそう云われ、俺は啞然とする。

「そういえば、この前の休み明けから、空いてる席がひとつあつたな——ってあれ？」

そうなる、俺よりも先にクラスにいた牛頸ぎうけいの席はどうなるんだ？  
確か、牛頸が行方不明になつたのって、俺が転入する二日前だつたよな？

もしかして、俺が座つてる席って、元々牛頸が座つていた席か？  
その事を二人に尋ねようと思つたが、そもそも誰がどの席に座つているとまではわからないだろうから、聞かないことにした。

「二人ともありがとう」

俺はそう生家と酒殿に言つと、急いで教室に戻つた。

教室に戻ると、男子生徒が一人残つていた。確か炭焼すみやきだっけかな？

「お、なんか忘れもんか？」

「んっ？ あ、ああ」俺は締まりのない返事をする。

「丁度よかった。おれさあ、彼女と約束してるんだよねえ。他のやつらみんな部活とか、早く帰っちゃったから、どうしようかと思つてたんだよ」

そう言いながら、炭焼は俺の手に何かを持たせる。——教室の鍵か？

「んじやな！ 戸締りよろしく！」

そついうや否や、炭焼は一目散に去っていく。俺はそれを見なが

ら啞然としていた。

ふと、今の状況はチャンスなのだと気付く。

休み明けから誰も座っていない席が窓際にひとつだけある。それが上八の席なのかどうかなのは俺にはわからない。

意を決して、その机を調べる事にした。

「……あれ？」

机の中には何も入っていなかった。

教科書とかは持って帰ってるとはいえ、それ以外になんか入れていると思っていたんだが、俺の見当違いか？

やっぱり五ヶ山と御手洗に訊いた方がいいんだろうか？

ふたりが話したくないことは重々わかつているが、気になっている以上、解決しないとすつきりしない。

俺はそう考えながら、俺は教室を後にした。

## 6・訊

「恵子、大丈夫？」

湊が恵子の表情を窺いながら尋ねる。

「うん。午後の授業殆ど出なかったから、もう大丈夫だよ」

恵子は小さな笑みを浮かべるが、その表情はぎこちないものであった。

「まったく、一体誰があんな悪戯したのかしらね？」

湊は手を頭の後ろに回しながらいう。

「きつとバチがあつたんだと思う」

「まだそんなこといつてる。あれは上八に無理矢理命令されたから、持ってきたんでしょ？」

「そうだけど、でも牛頸さんの頭に直接落としたのは私たちなんだよ？」

恵子は湊を見やる。湊は恵子から視線を逸らした。

「牛頸さん。そりゃ女子から嫌われてたけど、だからといっていじめのターゲットにはなっていなかった」

「上八と牛頸って、前々から犬猿の仲って話だったからね。確かお父さん同士が上司と部下の関係だったんだっけ？」

湊はそう云うと、恵子は少し思いついて頷いた。

「牛頸さんのお父さん、凄く優しいってイメージがあつたし、立派な仕事をしていたはずなのに…… あんな事になるなんて」

恵子は立ち止まり、深い溜め息を吐いた。

それは去年の今頃、牛頸静江の父親である直隆は自殺した。自身が担当している事業で大失敗を起こしての事である。

それまでは牛頸と上八の関係は、父親同士と同じものであったが、立場は一転する。

上八の私情を挟んだいじめは徐々にエスカレートしていき、女子全員が牛頸静江をいじめていた事になる。

「上八さんも休み明けから一回も学校に着てないし、一体どうしたんだろ？」

恵子がそう呟いたときである。うしろからサイレンを鳴らしていないパトカーが近付き、二人の隣りを徐行するように並んだ。

助手席の窓が開き、中から三十代の男性が顔を覗かせる。

「あゝ、すみません。ちよつとお尋ねしていいですかねえ？」

恵子と湊は男性を見る。「はい。なんでしょうか？」

「ちよつと人を探してしましてね。あなたたち、五ヶ山恵子さんと御手洗湊さんですよね？」

そう云われ、二人は驚く。

「どうして私たちの名前を？」

「いやいや、ちよつと立ち止まってくれませんか？ 結構徐行って燃費使っんですよ」

男性からそう云われ、恵子と湊は足取りを止めた。パトカーは少し離れた場所に停まり、中から二人の男性が下りてきた。

「すみませんね。あ、申し送れました、私『雀居哲平』<sup>ささいてつぺい</sup>といいましてね。こっちは部下の『小笠木智哉』<sup>おかさぎ ともや</sup>くん」

男性——雀居と部下である小笠木の二人は、懷から警察手帳を取り出し、二人に見せた。

「警察の人が、私たちに何のようなんですか？」

湊は険しい表情を浮かべ、警官二人を睨みつける。

「いやいやあ、実はある事件が起きましてねえ？ ほら、昨日パトカーがこの町を引つ切り無しに走ってたでしょ。知ってました？」

そう云われ、恵子と湊は学校前をパトカーが横切つていったのをおい出す。

「それと私たちが何の関係があるんですか？」  
湊がそう聞き返すと、雀居は少しばかり恵子と湊から視線を逸らす。

「牛頸静江さんが自殺したのご存知ですかね？」

雀居の言葉に、恵子と湊は一瞬耳を疑った。

「自殺って…… 牛頸さんは行方不明じゃなかったんですか？」

「ええ。最初そういう形で搜索願が出されていたんですけどね。後々見つかった彼女の靴で自殺と判断されたんですが、どうして自殺をしたのか覚えあります？」

雀居は冷たい目で恵子と湊を見た。

「し、しりません。私たちあまり牛頸さんと話したことありませんでしたから」

恵子は雀居から視線を逸らすように顔を背けながらいう。湊も同様である。

「そうですね。しらないってことかあ、それじゃあ仕方ないですね」  
雀居は残念そうな表情浮かべ、パトカーに乗り出した。

そして、去り際に助手席の窓から顔を覗かせ、恵子を湊を見るや、  
「牛頸さんをいじめていた主犯と思われる上八瑞希さんの水死体が、昨日発見されましたね。死後二日ほど経ってるんですけど、何か知りませんか？」

恵子と湊はそれを聞くや、血の気が引いていくのを感じた。

「し、しりません」

「そうですね、ではこれで失礼します。お手数お掛けしました」

雀居がそう云うと、パトカーは走り去っていった。

恵子と湊はパトカーが去っていくのを見送りながら、ふと誰かがうしろにいる気配がし、振り向いた。

「え、っと—— 二人ともどうしたんだ？」

後ろにいたのは裕樹であった。二人が怪訝な表情で振り向いたの

で、裕樹は途惑っている。

「な、なんだよ。そんな恐い顔して」

「吃驚したあ。てつきり牛頸さんがうしろにいるんだと」

恵子は胸を撫で下ろしながら、呟く。「恵子？ 何を言ってる」

湊が言葉を遮る。

「裕樹くん、今帰り？」

「あ、ああ。今帰るところだけど——さっきのパトカーは？」

裕樹がそう尋ねると、湊はハツとした表情を浮かべ、

「あ、いや。ちよつと道を尋ねていたって」

そういうが、裕樹はすぐにそれが嘘だということに気付く。

「いいよ湊、裕樹くんに云つても大丈夫な気がするから」

恵子がそういうや、湊は彼女のほうを見るや、戸惑いを隠せないでいた。

「裕樹くん、これからちよつと昨日云ってきたところにいこうと思うんだけど、時間ある？」

恵子にそう云われ、裕樹は少しばかり考えた。

これは牛頸静江の事を聞くチャンスかもしれないと——

哭沢女神の祠がある崖の一角を、町の人は『哭浜海岸』<sup>めいひんかいがん</sup>というらしい。

哭沢女神が誕生した逸話は、前にも話しているのでここでは端折<sup>はしり</sup>るが、この海岸はそれを基<sup>もと</sup>に名づけられたという。

「裕樹くん、湊から聞いたけど、牛頸静江さんのことを訊き回ってるんですよ？」

五ヶ山がそう俺に尋ねる。訊き方はあれだが、まあそうなるか。

「ああ。そうだよ」俺は素直に答える。「けどどうして同じクラスをやつなのにいないなんて嘘だったんだ？」

俺は御手洗を見やる。彼女は申し訳なさそうに視線を逸らした。

「別に隠してたわけじゃないの。でも、まさか自殺してたなんて知らなかったから」

「お前たちが殺したんじゃないかねえのかよ？」

俺はハッキリと二人に云った。

「わ、私たちは何も……ただ、上八さんに命令されて」

「自分たちも被害者ってか？ はっ、晒わせる」

俺は鼻で笑うや、二人を蔑んだ目で見やる。

「そ、そんな言い方—— そりゃ、私たちも牛頸をいじめていたことには変わりないけど」

御手洗が締まりのない声を出す。

「要するにあれか？ 自分たちは上八っていうやつに命令されたから、仕方なく牛頸静江をいじめていた——」

俺がそう云うと、二人は黙り込んだ。

「っけんな。誰に命令されたかじゃねえんだよ。いじめに加わった時点で、二人はいじめの側に入ってるんだよ！」

「そ、そんなこと！ どうして裕樹くんが知ろうとしてるの？」

五ヶ山はそう叫ぶ。確かに彼女たちからすれば不思議な事である。ハッキリ云って牛頸とは顔も知らない赤の他人だ。

「二人がいじめていたことを後悔してるなら、いいさ。ただ、ひとつ気になることがあるんだ」

俺は自分の頭を掻きながら、話題を変える。

「生家から聞いたけどよ。お前たちが二年の時から牛頸のいじめはあつたんだよな？」

「な、渚にも聞いたの？」

御手洗が怒った表情で聞き返す。「すまねえ、ただお前たちがいじめに加担してるとは思っていないようだし、それに関しても触れないから安心しろ」

そう云うと、五ヶ山と御手洗は互いの顔を見る。

「どうやら嘘は云ってないみたいだし」

御手洗は五ヶ山を見る。

「ごめんなさい」

五ヶ山は跪き、慟哭した。

「ごめんなさい。ごめんなさい。牛頸さん…… ごめんなさい」  
何度も俺ではなく、牛頸静江に謝り続ける。

「なあ、牛頸静江がいじめられていた時、担任や他の先生は知っていたのか？」

「……知ってたと思う。ううん、日に日にエスカレートしてたから、知らないほうが可笑しかったけど」

「それなのに、どうしてこんなことになるまで、ほったらかしにされてるんだよ？」

俺がそう怒鳴ると、御手洗はキツと俺を睨みつけた。

「裕樹くん。学校の先生ってね、生徒個人のことまで頭が回らないものの」

「でもよ——」

俺は言葉を止めた。前の学校もそんなもんだったからな。

俺は溜め息混じりに深呼吸する。

「二人が素直に答えてくれたから話すけど……俺だって二人と一緒にだよ」

そう云うと、御手洗は「え？」と聞き返す。

「一緒って、どういうこと？」

五ヶ山は立ち上がり、俺の方を見る。

「そのままの意味。おれも加害者なんだよ。前の学校でな」  
俺はその場に座り、少しだけ昔の事を思い出した。

——何てことない。ただの昔話だ。

俺がいじめていたそいつは、ハッキリ言っただ暗で、気持ち悪くて、弱くて、何を考えているのか、どうして生きてるんだろって云うほど醜い<sup>みにく</sup>やつだった。

そういうやつだから、自然とクラスの中で孤立し、いじめる側のターゲットになってしまったのだろう。

俺もそいつをいじめていた。ああ。いじめていた。誰も見ていないところで——

でも、そいつはおれたちいじめるやつらに反旗を翻した。

もちろん、いじめる側の暴力は日に日にエスカレートしていったが、そいつはそれに耐えていった。

逆にいじめるやつらに変化が起きたんだ。ひとり、またひとりといじめる側から離れていく。

最後に残ったやつも、いじている感覚がなくなっただろう。自然とそいつをいじめるやつはいなくなった。

そいつは勝ったんだ。いじめるやつらを懲らしめようという憎しみから——

もしその憎しみに苛まれていたとしたら、そいつはもうこの世にはいなかっただろうけど……

「って、すまねえな。つまらねえ昔話なんて聞かせちゃって」  
俺はジッと聞いてくれていた二人に謝る。

「どうして謝るの？ だって、その人いじめから立ち直ったんだよね？」

「立ち直ったかどうかはわからねえけど。まあ、中にはすんげえ暴

力で何でも解決する馬鹿がいてさ。気に入くわねえことがあると、いつもそいつを殴ってたんだ。それこそ顔が腫れるくらいにさ」

それを聞くや、二人は目を逸らした。

「男のいじめつてさ、目に見えるんだよな。痣とかの外傷とかで。でも、女のは陰湿だからなあ、精神的な苦痛の方が強いだろ？ 五ヶ山が家から持ってきた生卵みたいにさ」

俺は五ヶ山を見ていう。「なんでその事を知ってるの？」と驚いた表情で聞き返す。まあそうなるか。

「ちよつとな。夢枕つて知ってるか？ ただしくは『夢枕に立つ』なんだけど、多分牛頸静江が俺の夢の中に出てきたんだ」

それを聞くや、五ヶ山と御手洗は啞然とする。まあこんな話信じてもらおうとは思ってないけど。

「たぶん、牛頸さん、私たちに死んだ事を知ってほしかったんじゃないかな？」

五ヶ山がそういう。まあそれなら納得いかないわけではないが、それならどうして俺の夢に出てきたんだ？ まあ、少なからずとも俺と境遇が一緒だったからか――

「でも、夢に出てきたのは何の接点もない裕樹くんなのよ？」

御手洗がもつともな事を言う。全く以てその通り。俺と牛頸には何の接点すらない。

「でも、裕樹くんの席つて、牛頸さんの席じゃなかった？」

そう云われ、俺は腰を抜かした。わかっていた事とはいえ、改めていわれるなあ――。

「ありがとう」

突然五ヶ山に礼を言われ、俺は呆然とする。

「本当の事を話すとね、私も湊も、牛頸さんのこと嫌いだった。いつも自分の父親が偉いって鼻にかけて、多分女子で好きな人はいなかったと思うし、男子もそうだと思う」

五ヶ山はゆつくりとそう俺に告げる。

「そうか。うし、二人には辛い事聞いちゃったから、後で埋め合わせになんか奢るわ」

「べ、別にいいよ」と五ヶ山が慌てふためく。

「構わねえよ。昨日だって、美味しいケーキをご馳走してくれたんだ。そうだ、昨日買ったケーキだけどよ、家族が美味しいって褒めてたぜ」

そう云うと、五ヶ山はどこかホツとした表情を浮かべていた。

そして再び海岸のほうを向き、「ごめんなさい」といい、深々と頭を下げた。

御手洗も同様に、深々と頭を下げる。

ふと、うしろから誰かが俺たちを見ている気がし、振り返ったがそこには誰もいなかった。

いや——隠れる場所なんてどこにもない。そうすると俺の気のせいだったのだろうか……

その帰り、俺は今回の侘びとして、二人がほしいものを奢ってやった。——もう今月の小遣い死んだけど。

## 7・孤立

昨晚の話だが、俺は宿題を終えると、それ以降何もする気が起きず、ベッドに寝転がり、そのまま眠りについた。

眠りが深かったのだろう。スッキリとした目覚めだったのを、朝食のトーストを食べながら思い出す。

「あらあ、裕樹くん。今日は機嫌がいいじゃない？」

母さんがサイドメニューにと作ったスクランブルエッグを持ってきて、俺の前におく。

「まあな。あ、父さん。やっぱり牛頸静江は俺のクラスメイトだったよ」

「そうか。すまないな、調べてもらって」

父さんはコーヒを片手に、新聞を読んでいる。いつもどおりの光景だ。牛頸静江のことはそれ以上ふれることはなく、俺と父さん、妹は黙々と朝食を食べた。

俺が家を出た丁度その時、御手洗が家から出てきた。

「おはよう」俺が挨拶すると、御手洗は会釈し「おはよう」と言い返してくれた。

「昨日はごめんね。お小遣い死んだでしょ？」

「まあな。確か50万はするレターセット買わされたからなあ」

俺がそう云うと、御手洗は立ち止まり、

「あ、あれってそんなにしたの？」

「ああ。あの店、ラベルに書いてある値段って、定価の千分の一なんだってさ？」

御手洗は少しばかり考え、

「よし。こ、今月一杯、わ、わたしを好きに使って」御手洗が赤ら

めた表情で俺を見つめる。

一応断っておくが嘘である。どうして御手洗がすぐに気付かなかったのかというと、俺は二人に好きなものを選ばせたが、会計のときだけ一緒にいなかったのだ。大体50万なんて大金、中学生が持つてるか？ ふつう…… 御手洗はすぐに気がつき頬を膨らませながら、俺を睨んだ。全く以て初心なやつだ。

「しかし、上八が死んでたなんてなあ」

「私もまだ信じられないよ。でも警察の人が云ってたから、多分本当なんだと思う」

俺は五ヶ山と御手洗が警察と何か話していたことは知っていた。どんな内容なのかはわからないが、恐らく牛頸静江のことについて聞いていたのだろう。

一昨日パトカーをよく見かけていたのは、牛頸を探していたのではなく、上八の死体が発見されたのが理由だそうだ。

「それに牛頸が行方不明になったのが俺が転校してくる二日前だから、少なくともGW中<sup>ゴールデンウィーク</sup>ってことだろ？ その間あったやつっているのか？」

「多分いないだろうし、牛頸も学校に行く以外は殆ど部屋から出ていないと思う」

まあ、いじめられてるやつがGWの時までいやなやつ顔を見たくないわな。世間は狭いって言葉もあるしな。

五ヶ山と合流したのは、学校から四百メートルほど離れたところだった。

登校時間のため、他にも学生の姿が見える。（中には小学生の姿もあったが、多分近くにある小学校だろう）

「おはよう」

「おはよう。昨日はぐっすり眠れた」

御手洗が五ヶ山に尋ねる。「うん。なんかビツクリするくらいスツクリした」

「私も、なんか肩の荷が下りたみたいにスツクリ眠れた」

二人の言葉に俺は違和感を持った。

半強制的にとはいえ、五ヶ山と御手洗は牛頸をいじめていた事になる。にも拘らず、二人がこうして会話してるのは、牛頸静江がそれを許したんだろうか？

——なわけないよな。俺だってあいつに怨まれても仕方ねえって思ってるし……

学校が目の前に見えてくると、なにやら人込みが出来ていた。

「すみません。牛頸っていう生徒の事について尋ねているんですけどね。あなた何か知りませんか？」

男性二人が登校している生徒一人一人に牛頸静江のことを尋ねている。

「あの二人、昨日の……」

五ヶ山が呟くように云う。「昨日のつて、二人に尋問してた？」

そう尋ねると、五ヶ山と御手洗は頷く。

「牛頸さんのことを訊いてるみたいだけど——」

五ヶ山が考えるように呟く。「警察は牛頸について何か云ってなかったか？」

俺がそう尋ねると、「哭めいひんかいがん浜海岸で牛頸の靴が見つかったって云ってたけど」と御手洗が答える。

そうになると自然と自殺の線が濃くなるか——

「おや？」と目の前にいる刑事が俺たちに気付き、近付いてくる。ハッキリいって、関わりたくない。

「行くぞ。こういうのは無視って相場が決まってるんだ」

俺がそう云うと、五ヶ山と御手洗は少し躊躇った表情で俺を見る

が、頷く。

丁度登校する学生が多くなってきたので、それに紛れ込むようにして、俺たちは校門に入っていく。

「ちよつとすみません。あなた塔原裕樹——さんですかね？」

30代くらいの刑事が俺の名を呼ぶが、俺は無視する。大体警察に関わると碌ろくな事がない。

「ちよつとお聞きしたい事があるんですけどね。」

（無視……）

「ちよつといいですかねえ？」

（無視…… 無視……）

俺と五ヶ山、御手洗が校門を潜ると、校舎の方から教師が二人出てきた。

「困ります。生徒たちに迷惑がかかるでしょ？」

教師が刑事二人を帰そうとする。

「雀居警部、ここは一旦引いたほうが……」

若い方の刑事が雀居警部と言われた刑事に耳打ちをする。

「仕方ないですね。今日のところはひきます」

そう云うと、雀居警部ともう一人の刑事はパトカーに乗り込んだ。（今日のところは——か……）結局、明日も来るって事じゃないか？

「おらあ！ お前たち！ 何をボサツとしているっ！」

三年の体育教師——確か、女原めはらだっけかな？ 女めつて漢字が入っている割には、タンクトップに短パンと、ボディービルダーのように体がしっかりとしている。

もう一人は御笠みかさという、二年の理科教師。眼鏡をかけている中肉中背なのだが、野球部の顧問をやっているくらいだから、体力がないわけではない。

カシャツという、カメラのシャッター音が聞こえ、俺はそちらを

一瞥すると、カメラのフラッシュが間髪入れずに光り、俺は目を細めた。

そして、写真を撮った人物は制服を着ているので、うちの生徒だということがすぐにわかった。

「これはニュースになるぞ。『3年女子、謎の失踪の結末。一人は自殺』」

言葉を呟くや、にやりとほくそえんでいる。

「お、おい！」

俺が声をかけるよりも先に、一目散に逃げていった。

まあ、うちの生徒みたいだから、もしかしたら会えるかもしれない。

「それにしても、警察も必死なんだな。そりゃあ人一人死んでるわけだし」

「でも、学校はいじめがあったことを公にはしな<sup>おおやけ</sup>いと思うよ。やっぱり名誉とか、傷が入るのがイヤなんじゃないかな」

——だろうな。前の学校でもそうだったし。だからあんなことになっただ。

「どうかしたの？ 怖い顔して」

御手洗が俺の顔を覗き込むようにして尋ねる。

「あ、いや。なんでもねえよ……」

俺は少しはにかんだ表情で答える。二人は首を傾げながらも、それ以上は何も聞かなかった。

教室に入ると、クラスの話題は今朝の事で持ち切りだった。

「ビックリしたわよね。牛頸さん自殺なんだって」

「お前らがいじめてたからだろ？」

「はあ〜っ？ 何云ってんのよ。あいつが調子こいてるからでしょ

？ 当然の報いじゃない？」

クラスメイトがやれ『他人事』のように話している。

俺は自分の席に座ると、何か違和感があった。

翼々よくよく見てみると、机の片隅に『ゴミムシ』という文字が彫刻刀が何かで掘られている。

「どうかしたの、裕樹くん？」

御手洗がそう尋ねると、

「誰、こんなことしたの？」

絶叫するようにクラス全員に尋ねる。

「知らねえよ。俺がきたときにはもう入ってたぜ？」

「昨日はなかったわよね？」

クラスメイトが動揺を隠せないでいる。

「別に気にはならねえよ。元々この机は牛頸静江が座ってたんだろ？」

俺がそう云うと、クラスがざわめく。

「そりゃ、そうだけだよ。今は塔原が座ってるんだろ？」

「そういえばよ、お前、昨日最後だったな？ まさかお前がしたんじゃないのか？」

昨日俺がクラスに戻った時、一人教室に残っていた炭焼がそういう。

「はっ？ もしかして自作自演か？」

クラスの何人かが冷笑したのがわかったが、

「俺が転校してから、美術で彫刻刀を使った授業なんてあったか？」

そう尋ねると、今度は全員が笑いを止めた。

「う、ううん。一回もなかったね」と女子生徒が言くと、何人かが頷く。

ほれみたことか。大体彫刻刀なんて、その日に持ってくるかだろ？ 学校においてたら、碌な事がないからな。

「それじゃ、一体誰がしたのよ？」

「お、俺は何もしてねえぞ？」

そもそもクラスの中で、牛頸静江が自殺したことを、前から知ってたやつは何人いたのかが問題なんだが？

そう尋ねると、殆どが今日警察に尋ねられて初めて知ったという。

「五ヶ山が昨日されたことも、覚えがあるんじゃないのか？」

俺がそう云うと、再びクラスがざわめいた。

「なんでそんな事知ってるの？」

「あれ？ 俺今適当なこと言っただけだな？」

そう云うや、男子は笑い出す。

「なんだよ、冗談かよ？ ビックリさせんな」

何人かがホッと胸を撫で下ろすと、

「そういえばさあ、警察が上八についても聞いてたなあ。最近何か可笑しいことはなかったかって」

「そうそう。大体上八って大人しいじゃん？ あいつ何考えてるのかさっぱりわからないんだよな？」

今度は上八の話題に変わり、クラスの担任が教室に入ってくると話はそこで終わった。

## 8・中庭

「そっか、酒殿さんや生家さんのところにも」

昼休み、俺と五ヶ山、御手洗は中庭で寛いでいた。その中に酒殿と生家が入ったというかたちになる。

「まああの様子じゃ、色々な生徒に尋ねていたって事になるからね。それに渚や千恵が、牛頸や上八のことを知ってるとは思えないし」

「酒殿さんはとにかく、生家さんはふたりが何をしていたのか……」俺が言い切る前に、御手洗が「もういいでしょ。反省してるんだから」と言葉を止める。

「そっというのは、本人が生きていたときにしろ。後悔先に立たずつてな」

「そうだね。原因は私たちにもあったわけだし」  
五ヶ山が落ち込むように顔を俯かせる。

「塔原先輩？ あかんではおまへんか？ 恵子ほんと湊はん、十分反省しとるようやし」

酒殿が助け舟を出す、

「酒殿さん。俺だって過ぎたことを蒸し返すほど精神は凶太くねえよ。でも……」

俺が次の言葉を言おうとした時だった。

カシャツというシャッター音が聞こえ、俺は音がしたほうを見ると、

「お前、今朝のパパラッチ！」

「裕樹くん？ それ結構古い気がするんだけど？」

と、五ヶ山からつっこまれた。——いや、そういう問題じゃない。「被写体に許可なく撮っていいのか？ 特に生家さんと御手洗！」

そう云われ、御手洗と生家はキョトンとする。

「ふたりとも、誰も見てないから云わないでおこうと思ったが、結構だらしく座ってるぞ」

俺がそう云うと、二人はあわてて正座した。それを見るや、パパラッチは舌打ちをする。

まあ、実際はスカートの中が見えそうだったんだよな。制服のままで体育座りなんてしてるからだ。

いくらうちの学校の制服が膝上までとはいえ、足を開いた体育座りは無防備すぎる。

「それで、パパラッチがいったい何のようだ？」

「パ、パパラッチじゃないんだなあ？　ぼ、ぼっくんはれっきとしたカメラマンなんだなあ」

俺の質問に、カメラを持った男子生徒が慌てるように吃る<sup>ども</sup>。どっちも一緒のような気がするんだが……。

「そつえば、今朝写真撮ってたけど、何か映ってたのか？」

「な、何も写ってないんだなあ？　せ、先輩の勘違いなんだなあ」

「時と場合によっては……　どうなるかわかるか？　一応盗撮って形になるんだけどな？」

俺は笑みを浮かべながらいう。

「そ、そんな恐い顔しないでくださいよお。こっちは目の前にいい被写体が——」

俺は右拳を男子生徒の顔面に寸止めする。

「あわわっ！」

男子生徒は驚き、腰を抜かす。「それ以上云うと、カメラごと壊すけど？」

俺はあくまで平然と穏便に事を終わらせたい。

「わ、わかったんだなあ。これ以上写真は撮らないんだなあ」

男子生徒は慌てて、土下座する。

「もういいんじゃないかな？ 私や渚の不注意だったわけだし」

余りにも可哀想と思ったのだろう、御手洗が俺にそう云うと、

「おう、御手洗先輩はなんて素晴らしいんだ。そんな人のパンチラ写真なんて撮ったばっくんはあ」

まるで歌劇風オペラに男子生徒は言う。「ちょ、ちょっとやめて！ なんか変な目で見られてる気がするから！」

御手洗が必死に止める。その表情には恥ずかしさが滲み出ていた。彼女の言う通り、周りを見てみると、何事かといった感じに他の生徒がこちらを見ていた。

「ところで今朝の話だが、写真は生徒たちなんだよな？」

「ええ。それを元に記事を作ろうと思ひましてね」

思い出した。なんかとんでもない見出しを呟いてたな。

「人の不幸を嘲笑うもんじゃないぞ。碌な事がないからな」

俺が忠告すると「ってもですね？ こういう特ダネみたいなものがないと、新聞部もやっていけないですよ」と男子生徒は言う。――んなの知るか。

「大体、特ダネっていうのは、余り生徒に知れわたっていないネタだろ？ 今回の件、多分もう殆どの生徒に知れわたってるだろ？」

「確かにあれだけ大々的に聞いてましたからね。学校側も公にはしないとはいえ、牛頸静江と上八瑞希の仲が悪かったのは周囲の知りえる事ですし」

男子生徒の言葉に生家が首を傾げる。

「つまり、仲が悪かったのは全員が知っていたけど、その理由となることは知らなかったと？」

「ええ。まあ、おふたりの父親が上司と部下という関係だったという事くらいですね」

さすが閨屋ぶんやだけの事はある、そういう情報は既に知ってるか。

「しかし、ある事がきっかけで、その上位関係は一変した。それは去年牛頸静江の父親が亡くなったことに意味があるんです」

「牛頸静江の父親が亡くなった原因ってなんなんだ？」

俺が五ヶ山と御手洗に尋ねる。この中では二人が一番知ってるかな。

「私たちはあくまで噂の形でしか知らないけど、牛頸さんのお父さんが何か大きな企画に関わっていたんだって、だけどそれが失敗して、その企画に費やした多額のお金と責務を会社に負わせてしまった。その責任をとるように自殺したって……」

「会社側としては何の利益にもならないけどな。人が死んだところで借金が減るわけでもなかるうに」

「そりゃそうだけどね。ただ牛頸さんのお父さん、その会社では部長レベルだったらしくて、責任感も人一倍だったみたいだよ」

——一種の鬱病による自殺か…… 真面目な人間ほどうつに成りやすいとはよく云うが……。

「要するに、上八が牛頸をいじめていたのは、今までの鬱憤を晴らすという意味もあってたってわけだ」

「上八さんの場合はね。私たちはただたんに気に食わなかっただけなんだけど」

捌け口の形は違えど、クラスの女子が牛頸静江を嫌っていたのはわかった。

「その心理を利用して、上八は二人を唆すように参加させていたってわけだ」

「今はもう反省してる。二度とあんなことしない」

五ヶ山と御手洗は蹲るように顔を俯かせる。さすがに今のは言い過ぎた。

「牛頸静江が自殺した原因はよくわかったが、問題は上八瑞希がどうして殺されたかだな」

「どうしてそないなことが言えるん？」

酒殿が首をかしげながら言う。

「牛頸はいじめによる自殺と考えると、多分間違いないだろうけど、

上八の場合、自殺する理由が思いつかないだろ？」

「でも、若しかしたら今までいじめていたことを悔い改めようと」

「人の怨みはそんな簡単には癒えねえよ。それに悔い改めるんだつたら、死ぬ事を選ばないだろうしな」

俺は五ヶ山と御手洗を見やる。——この二人は多分大丈夫だろう。

「なあ、聞屋——」

「聞屋じゃないっす。高祖たかすいますう」

男子生徒——高祖はキツパリという。

「高祖か…… お前カメラ持つてるけど、それいつもなのか？」

「当然。いつ、どこでなにが起きるかわからない世の中ですからね。カメラと筆記道具は常日頃から常備してます」

高祖は胸を張って言っ。

「それって学校内だけか？」

「いいえ、町の中でもです」

——そうになると、一昨日パトカーが行き交っていたのは知ってるか？

その事を尋ねると、予想通り知っていたようだが、内容までは知らなかったらしい。

「問題は昨日、警察が五ヶ山と御手洗に尋ねたかだな。いじめていた事は当人たちしか知りえないだろ？」

「言われてみれば確かに、それでは誰かがチクツたと？」

その可能性は否定できないが、どうして二人なのだろうか？ 他にもいじめていたのはいたらしいし。

「これは新聞記者としての血が騒ぐってもんですよ」と高祖が張り切る。

——勝手に騒がしてる。と言おうと思ったが、面倒なので止めた。

「でも、犯人は学校の中にいるとは限らないしな。もしかしたら母親がしたって可能性もあるし」

「ねえ。この話、もうやめない？」

五ヶ山がそう俺に尋ねる。「確かに、これ以上考えても拉致があかなそうだ」

そう云い切ると、昼休み終了のチャイムが学校中に鳴り響いた。

「それじゃ私たちは戻りますね」

そう云うと、生家と酒殿は立ち上がり、それぞれ自分の教室へと戻っていく。

「それじゃ先輩、何か情報が入ったら教えますね」

高祖は一人張り切ってる。俺はもう事故解決してるんだが？

「私たちも戻ろう？」

五ヶ山がそう云うと、俺と御手洗は自分たちの教室へと戻った。

ふと、何か違和感を感じた。

牛頸静江をいじめていたことを知っているのは担任を含めて、俺のクラス全員だ。

だけど牛頸は恨みを晴らすどころか——自殺を選んだ？

それに遺体は未だに発見されていない。発見されたのは上八瑞希の水死体だけだった。

——それがどこか不自然に思えた。

## 9・夕闇

住宅街の一角に四階建てのマンションがある。その一室の玄関先に雀居と小笠木の二人は立っていた。ドアのプレートには『403』と書かれている。

小笠木は緊張のせいか、生唾をゴクリと飲み込む。

雀居が意を決した表情で、部屋の呼び鈴を鳴らした。

『どちらさまでしょうか？』

インターホンからおっとりとした女性の声が聞こえる。

「すみません。弥蛛署みくもの雀居と申します。ちよつと娘さんのことについて、奥さんにお聞きたい事があるんですけど？」

雀居がそう云うや、インターホンが切れる音がし、数十秒後、ドアの鍵が開く音が小さく響く。

ドアを開けた女性は一目で衰弱している事がわかるほど顔がやつれており、肩まである髪は婆娑羅髪はつらつと成り果てている。

それもそうであろう。去年夫を亡くし、剩あまつさえ娘である静江を亡くしているのだ。

心身ともに衰弱しない方が可笑しい。

「それで、私に聞きたいことは？」

女性——牛頸夏海なつみは雀居に尋ねる。

「娘さんを最後に見たとき、どんな様子でした？」

「わかりません。娘は私に何も、口すら聞いてくれませんでしたから」

夏海は申し訳ないように顔を俯かせる。

「普段と違っていたとか、そんな些細な事でもいいんです」

「娘は学校に帰ってきたら、殆ど自分の部屋にいました」

——さすがに母娘のあいだでもプライベートなことには触れないようにという気遣いがあるのだらうと雀居は行き詰まった。

学校に行つたのはいいが、学校が事件の事に関して、ましてや牛頸静江がいじめられていたことによる自殺という見解がある以上、それを尋ねに行つたはいいが、門前払いを食らっている。

そのことがわかつていたので、あえて雀居と小笠木は校門の前で登校してきた生徒たちに牛頸静江のことを尋ねていたのだ。

——その結果は散々なもので、殆ど重要とされないものばかりであつた。

「ところで上八瑞希さんのことについて、何かご存知ですか？」

雀居がそう尋ねると、夏海は首を横に振る。

「そうですか……」と雀居は詫びを入れた。

しかし、夏海が——強いては去年自殺した牛頸直隆の部下に上八瑞希の父親である幸光ゆきみつのことを知らないとは思えないと雀居は考えていた。

そして休み明けから上八瑞希は行方がわからず、ついには昨日水死体として発見されている。

その事もあるが、そもそも学校から連絡網として、クラスメイトの名前と連絡先が書かれたプリントをもらうはずである。

牛頸静江と上八瑞希は奇しくもクラスメイトなのだから、知らないほうが可笑しいのだ。

牛頸静江が母親と会話をしなくなったのは、去年父親が亡くなつてからであり、その間、進級し、クラスが変わったとしても、プリントを母親に渡していないとなれば、知る由もないということになる。

さすがに娘のことはわからずとも、父親の事は知っているだらう

と、小笠木がそのことについて夏海に尋ねる。

「いえ、夫は仕事を家に持ち帰らない人でしたから、私たちもあまりそのことについて触れることはしませんでした」

要するに仕事上の関係である上八幸光のことは顔すら知らない。

雀居はこれ以上訊いても、進展しないと判断するや、

「すみませんね。何か気になることがあったら、連絡を下さい」

といい、踵を返そうとした時だった。

「警部さん。どうか娘を殺した犯人を見つけ出してください」

そう云うや、夏海は深々と頭を下げ、ドアを閉めた。

それを見た雀居は少しばかり、夏海に違和感を感じたが、それについて咎めることはせず、下に停めている車へと乗り込んだ。

「とんひ 鶯の大法螺吹き——ですかね？」

助手席の窓を開け、全開にした窓の縁に肘をかけながら、煙草を吹かしている雀居がそう呟く。

「なんですか、それ」

「こつちの子供がよく使つてる悪口ですよ。鶯は元々警戒心の強い鳥ですから、そのことから、警戒している相手に対して嘘を吐くという言葉です。よくケードロとか、カンケリとかで、相手に違う事を言つて、惑わせる意味があるんですけどね」

「つまり、牛頸夏海は上八瑞希のことを知っていると、警部は思つてるんですか？」

思わない方が可笑しいでしょ？と雀居は言った。

「しかし、それを証明する証拠が何一つ見つからないどころか、牛頸静江の遺体がいまだに発見されないのも不自然ですしね」

車を運転する小笠木は考えながらも、前をジッと見つめる。

「そこなんですよね。もう十日以上行方がわからない。哭浜海岸の崖近くに牛頸静江のものと思われる靴が発見されましたから、警察も自殺と他殺の両方で調べているんですが——」

雀居は自ら言葉を遮り、少しばかり考え込む。

「どうしたんですか？」と小笠木が尋ねる。

「云ってませんよね？」

その言葉に小笠木は雀居を一瞥する。

「私たちは牛頸静江の死に関して、自殺と他殺の両方で操作しますが、靴が発見されている以上自殺が農耕と考えていますが、やはり他殺に関しても否定できない状態なのですが、そのことについてまだ伝えていません」

「それがなにか？」と小笠木が尋ねる。

「あの人は『娘を殺した』と云ってましたけどね」

「まあ、そうなるんじゃないんですかね？ どちらの可能性も否定出来ないわけですから」

小笠木はそういい、運転に集中する。

「だといいんですがね」

雀居は溜め息混じりに紫煙を噴いた。

「塔原しえんぱくいつ！」と教室から出てきた俺に廊下奥から声をかけてくる輩が一人。

俺は声がしたほうに振り返ると、高祖がゼエゼエと息を整える。

「どうかしたのか？」

「ちょ、ちよつと、た、大変なものを見つけたんですよ」

「大変なもの？」と教室から出てきた五ヶ山がそう尋ねる。

「こ、ここではなんですから、ちよつと部室まで来てください」

そう云うや否や、高祖は俺の手を引っ張る。

「お、おい！ ちよつとまで！ 順を追って話せ！」

俺はそう尋ねたが、高祖に無理矢理俺を部室（高祖が新聞部だというのを、連れて行かれている間思い出す）へと連れて行かれた。

「んだよお？ 一体何があつたんだ？」

「これっす！ これっすよ先輩」

高祖は部屋にひとつしかないパソコンの画面を俺に見せる。

（これって、哭浜海岸だよな？）

俺は思い出しながら写真を見る。橙色に輝く夕日が、海に沈もうとしているところを、高祖は偶然発見し、急いでシャッターをおろしたという。

そのせいか、岸壁にある祠が朱色に染まっていた。

「結構綺麗に撮れてるな」

俺がそう云うと、「違うっす！ そっちじゃないっすよ」と、高祖はマウスのカーソルを特定の場所でグルグルと動かし始める。

その部分をよく見てみると、人が立っている。

「これがどうかしたのか？」と再び尋ねる。

「これって…… 牛頸のお母さんじゃない？」

何時の間にか入ってきている御手洗がそう呟くと、五ヶ山もそうかもしれないと同意する。

俺は見た事がないのでどうもいえないが……

「そうなんですよ。まあ、これだけだとなんでもないんですけど、ちよつとこれ見てください」

高祖はモニターの画面を写真からフォルダ画面にかえる。

そしてファイルをクリックし、その部分だけ反転させた。

「これがさつき見てもらった写真のファイルなんですけど、ちよつと更新日見てくれませんか？ これはそのまま写真を撮った日になってます」

ファイルの更新日は四月二十九日になっている。

「これって、牛頸さんがいなくなった日より前だよな？」

確か俺が牛頸のことを知ったのが十三日くらいだから、それから逆算して、十日以上前の事になる。

「でもどうしてこんなところに」と御手洗が首を傾げる。

「そりゃ、娘があそこで自殺か他殺かはわからないけど、死んでるのを――」

俺は言葉を止め、御手洗と五ヶ山を見やる。

「二人が最後に見たのはいつだ？」

「余り覚えてないけど、でもGW前だったよ。二十九日は昭和の日で祝日だから、その前の日は月曜だから学校でしょ？ その日は学校に登校してるはずだけど」

「上八はその日来てたのか？」

俺がそう尋ねると、五ヶ山と御手洗は頷いた。

「上八がいなくなったのはGWの休み明け。俺が来たのが確か三日くらいだから、丁度すれ違いになってるわけだ」

俺が学校に転入したのは、休み明けの五月六日になる。

「なあ、この写真一枚印刷できねえか？」

俺がそう云うと、高祖は首を傾げる。

「多分、今朝来ていた警察がまた明日来るかもしれねえからな」

「その写真を見せるって事？」

五ヶ山からそう云われ、俺は頷く。

「でも、ただこれは写っていただけで、なんの証拠にはならないんじゃないですかね？」

高祖はそういうが、俺は印刷してくれと頼む。

高祖はしぶしぶ写真を印刷してくれた。そして印刷し終えた写真を受け取り、俺は礼を言う。

指定通り、印刷した日付が書かれたものでだ。

「でも、それをどうするの？」

五ヶ山に尋ねられ、俺は少しだけ考える。

「なあ、あの哭浜海岸って、哭沢女神が祭られてるんだよね？」

「う、うんそうだけど」と、五ヶ山は答える。

俺はジッと写真を見つめ、高祖に礼を言うや、部室を出た。

一息おいて、五ヶ山と御手洗が部室から出てくる音が聞こえる。

「ちょ、ちょっと待って」

御手洗に声をかけられ、俺は立ち止まる。

そして振り向き様に尋ねた。

「ひとつ確認とって良いか？」

俺がそう五ヶ山と御手洗に尋ねると、二人はキョトンとした表情で俺を見つめる。

「写真つてのは、逆光つてのがあって、被写体が影で見えなくなるんだ。それなのにどうして二人はこれに映っている影を牛頸の母親だつて言い切れたんだ？」

俺は高祖からもらった写真を二人に見せる。案の定牛頸静江の母親と思われる人影は逆光を浴びており、その言葉どおり影でしかない。——判別することはありえない。

「そ、それは——」

五ヶ山と御手洗が口籠もる。

「——どうなんだ？」

ふたたび尋ねると、二人は黙<sup>だんま</sup>りを決め込む。

「ぷっ！」と俺は噴出してしまった。

それを見て五ヶ山と御手洗は啞然とし、何がなんだかという顔を浮かべた。

「なははははっ！ ごめんなあ。ちょっと二人に鎌をかけたんだけど、やっぱり無理だったか」

俺は笑いながら、二人に説明するが、「ど、どういうこと？」とまだ理解出来ていない。

「俺は牛頸静江を知らないからな。当然どんな背格好をしているかなんてわからない。だからこの写真に写っている人物が誰かなんて

のもまずわからないんだ。当然写真は逆光を浴びているから傍目では誰なのかもわからない。もしかしたら違う人だった可能性だってある」

俺がそう言うと、二人は互いの顔を見る。

「それなのに、ハッキリと二人は牛頸静江の母親だと言い切った」

「そ、それは…… ほら、見かけたことがあるから…… ねえ？」  
御手洗がそう五ヶ山に尋ねる。

「う、うん。よくスーパーで買い物してるのを……」

——あたふたとしているのが目に見える。

「可笑しいよな？ これ」

「ど、どこが？」

御手洗は笑いながら言うが、目が笑っていない。

「人影が立っている場所だよ。夕日で逆行になっっているからよくわからなかったけど、これ『足場がないんだよ』」

そう云うと、二人は首を傾げる。

「な、何言ってるの？ 足場がないって、そんなところ人が立てるわけじゃないじゃない？」

ああ。御手洗の言う通りだ。人が空中に立つなんて御伽噺じゃねえんだ。だから——人の姿はあっても、影がないのが可笑しいんだ。

さっきも言ったが、逆光は光が被写体のうしろがわにあるときになる。影は太陽が被写体を照らしたことによって、その先に出来る。太陽が海に沈みかけているので、まだ周りは明るい。それならば影が丘の方に出来ていても可笑しくない。——それなのになかったんだ。

人影は横を向いておらず、こちらを向いている。もちろん崖には変わりないが、丁度足場から食み出たところから人影は出来ていた。要するにこれは——自殺する瞬間を撮った写真ということになる。

「と、塔原先輩……！ た、大変です」

新聞部の部室から高祖が慌てて俺と五ヶ山、御手洗の中に入り込む。

「た、大変です。先輩に言われたとおり、人影の光度調整をしてたら、とんでもないものが……」

——やっぱりこいつに頼んで正解だった。もし駄目だったら、父さんに頼んでパソコン編集させてもらおうと思ってた。

「落ち着け、それで何がわかったんだ？」

「これ、これを見てください」

そう云うや、高祖は写真を俺たちに見せる。

「あれ、この写真って、さっき裕樹くんが受け取った写真じゃない？」

五ヶ山が高祖に尋ねる。が、高祖は驚いた表情から普段の表情へと戻せず、顔が可笑しくなっている。

「これ、牛頸静江ですよ！ それとうしろに誰かいます」

その言葉に五ヶ山と御手洗は高祖から写真を半ば強引に奪い取る。

「ほんとだ。牛頸さん…… でも、どうして私、おばさんだっと思っただろ？」

「多分、偶然重なったんだ。人影になってたからそれがわからなかった」

俺がそれを説明すると、「それじゃそれが丁度大人くらいの背丈になっただって事？」と御手洗が尋ねる。

「それでどうするんです？ この写真、やっぱり警察に見せるんですか？」

俺は元々からそうするつもりだし、さっさと事件を解決してくれないとなあ、そろそろやばそうだし——

「ああ。後は俺に任せてくれないか？」

そう云うと、俺は急ぎ足で家に帰った。

家に帰ると、俺は父さんの部屋のドアをノックする。――が、反応しない。

まあ、こんなに早く帰ってきてるとは思っていなかったけど。そう考えながら、リビングに行って掛け時計を見る。――午後5時ちよつと過ぎ。帰ってきていないのも当然か？

「あら？ 裕樹くんお帰り」

リビングで横になって寛いでいた（翼々見てみたら足を上げ下げしている）母さんが俺に声をかける。

「あ、母さん。父さん今日何時帰ってくる？」

そう尋ねると、母さんは少しばかり考える素振りを見せると「いつもどおりの時間じゃないかな？」と答える。

何時もの時間か――まあ、仕事が滞っていなかったら、大体7時くらいには帰ってくるか。

俺はそれまで、時間を潰す事にした。

父さんが帰ってくると、俺はすぐに話があるから、夕食の後、部屋に来てくれと頼んだ。それから何ら変わらないいつもの賑やかな食事だった。

食事を終え、部屋で寛いでいると、誰かがドアをノックする音がし、俺は起き上がる。

「裕樹、父さんだ。邪魔するぞ」

そう云うと、父さんはドアを開け、部屋の中を覗きこむ。

「あ、父さん。ちよつと相談があるんだけどさ」

俺がそう切り返すと、父さんは「なんだ。今月の小遣い、もう使い切ったのか？」と、頭を抱える。

全く以て正解なんだけど、今はそれどころではない。

「実はさ、この前言ってた牛頸静江のことなんだけど、ちょっとこれを見てくれないかな？」

そう云うと、俺は制服のズボンのポケットから、写真を取り出し、父さんに見せる。

「これがどうかしたのか？」

「崖の方に人影があるだろ？」と俺は指でその場所を示す。

「これは…… 自殺か？」

父さんは写真を翼々見つめる。

「傍から見れば…… ね。でもそのうしろに人がいるみたいなんだ」  
そう云われ、父さんは人影を見つめる。

「裕樹の言う通り、人が二人いるように見えなくてもないが、一体どうしたんだ？ この写真」

俺は学校の新聞部にいるやつが、偶然この写真を撮ったと説明する。

「偶然か…… 確かに夕日を撮るにはもってこいの瞬間だっただろうが、まさかこんな写真を撮られているとは本人も知りえないだろうな？」

そのことは高祖も驚いていた。何せ夕日を撮っただけなのに、こんなものが写りこんでいたのだから。

「それじゃ、この写真に写っているのは牛頸静江に間違いないんだな？」

「ああ。クラスメイトに尋ねたら、そうだと云っていたから、たぶん間違いないと思う」

俺がそう云うと、父さんは携帯を取り出し、誰かに電話をかける。

「あ、私だ。至急、牛頸静江が最後に目撃された時間と日付を調べ

直してくれ。それと母親の言動もだ」

「――仕事か？」

俺がそう尋ねると、父さんは頷く。

俺はそれを見るや、まぶた瞼が重たくなっていくのを感じた。

「すまないな、利用するような形になってしまつて」

父さんは俺に向かつて、小さく頭を下げる。

「構わねえよ。前の学校だつて、父さんやクラスメイトが弁護してくれたから、こつやつて普通に学校に行けてるんだ」

俺は椅子に凭れながら云う。ギイギイと背凭れが鳴つた。

「それに、引つ越す前にぶん殴りたいと思つていたし――」

「物騒な事を言つなあ。まあ、あの事件は正当防衛として処理されているから、お咎めなしにはなつてているが――」

「話を戻そうぜ。それでどうなんだ？ 検事さん」

俺がそう云つと、父さんは頭をかく。

「検察は警察と違って、職務質問をする権利は持つていないからな。それに学校を調べるのは中からと相場が決まつている」

「潜入捜査つてことか？ こつちは迷惑かかつてるけど、まあその分来月の小遣いはたいてくれるんだろな？」

「わかつてる。まあ法律上そういうのは許されていないが、警察もスパイを送っている場合があるから、似たり寄つたりだ」

父さんは写真を翼々見つめる。

「それでさ、その写真、明日警察に見せようと思つんだ。多分明日も来るだろうから」

「警察にか？ うーむ、まあ事件当時の重要な証拠写真にもなるわけだし、見せないわけにもいかないな。よし、それじゃこれは明日父さんが責任を持つて」

「いや、明日自分で持つていくよ。直接疑われた理由も聞きたいしね」

俺はそういうと、父さんから写真を奪い取る。

「なあ、父さんが今やってる仕事って、牛頸静江の父親が自殺した事に関してなのか？」

「さすがにそれは教えられんな。まだ法廷中のことは…… 終わった事なら教えられるが」

俺は一瞬、牛頸直隆が自殺した事を思い出し、

「確か牛頸直隆は仕事に失敗して、その責任からきたうつ病による自殺ってことになってるんだろ？ そうなると法廷は過労による裁判って事になってるのか？」

「まあ、牛頸直隆の事に関しては、去年の事件だからな。もう決着がついて、母親に会社から賠償金が受け渡されているはずだ」

そうなると――どうして牛頸静江は殺されたんだろうか？ いや、そもそも自他殺のどちらかを決めるのは、まだ早い気がする。

それにこの写真に写っているのは、牛頸静江で間違いないだろう。だけでもうつひとつ、牛頸静江のうしろに写っている人影は……

――突然、父さんの携帯が鳴り、父さんはそれに出る。

「っと。もしもし、私だ。そうか、わかった」

父さんは俺の顔を見ながら、複雑な表情を浮かべる。  
そしてひとつ溜め息。

「わかった。牛頸夏海に関して、もう少し調べてくれ」

そう云うや、父さんは電話を切った。

「なんかあったのか？」

俺がそう尋ねると、父さんは少しばかり顔を俯かせ、

「お前の友人が云っていた通り、牛頸静江が哭浜海岸の崖から転落したのが4月28日としたら、ここ二週間のうち、遺体が打ち上げられていないのは不自然だよな？」

そう訊かれても、パツと答えられるわけがない。

「水死体の場合、体内から生じる腐敗ガスによって、体が膨れあがり、それによって水面に浮かび上がるんだ。上八瑞希の遺体が発見

されたのもそれが原因だ」

「でもよ。それだったらおもじ錘が何かを付ければ」

「いや、2、30キロの錘をつけても、浮かび上がるという報告もあるからな。それにこの写真から見る限りでは、錘をつけているとは思えん」

確かに父さんの言う通り、牛頸静江の足元に錘のようなものはつけられていない。となると、やっぱり浮かび上がらないのは可笑しい事になる。

「上八瑞希の方はどうなんだ？ 確か水死体で発見されたんだよね？」

「情報によると、上八瑞希の死亡原因は絞殺となっている」

「絞殺？ …… ってことは、首を絞めた後、海に投げ捨てたって事になるのか？」

「情報が正しければな。一応検死結果を踏まえて、改めて検察側で捜査をするが」

父さんから聞いた話だが、検察の主な仕事は、警察の捜査に不備がないか、その捜査に誤りがないか、証言に偽りがないかの最終確認をすること。

つまり、小説を出す際の推敲すいこう、もしくは校正を意味しているらしい。

そもそも日本の法律上、起訴・不起訴を決することが出来るのは検察で、警察にはその権利はない。

「でもそれって、“犯人が逮捕されれば”—— だろ？」

俺がそう指摘すると、「痛いところをつくな」と父さんは呟きながら頭をかく。

「確かに犯人を逮捕するのは警察の役目だ。検察はその後、犯行を立証しなければいけない。裕樹の言う通り、お父さんの仕事はそれ以降の処理ということだ」

父さんはそう云うと、部屋を出て行った。

俺はふと引越し前の——前にいた学校のことを思い出していた。

誰も真実を話すことが出来なければ、それは犯行を認めたとはいえない。

(くそっ……)

俺はサンドバッグに一発拳を当てた。

## 11・通告

目を覚まし、リビングに入ると、いつもならいるはずの父さんの姿がなかった。

千鶴は……見当たらないし、さっきトイレにも行ったが、いなかったから、まだ寝てるんだと思う。

——と思っていたら、丁度千鶴が自分の部屋から出てきた。

「あ、おふぁよう、おにいふぁん」と欠伸を浮かべながら、挨拶をする。

「ああ。おはよう千鶴」

俺の声が聞こえたかどうかはわからないが、千鶴はそのまま洗面所へと入っていった。

「なあ、母さん。父さんは？」

リビングに戻るや、俺は炊事場で朝食の用意をしている母さんに、父さんの事を尋ねた。

「ああ。お父さんだったら、仕事で朝早くから出て行ったわよ」

そっか。昨日かかってきた電話だなと自答する。

それからは何も変わらず、俺と千鶴は朝食を平らげた。

学校に行く準備を整え、家を出ようとすると、チャイムが鳴った。  
「こんな朝早くから、誰かしらね？」と母さんは水仕事をしていた手を、タオルで拭きながら、小走りに玄関へと向かった。

化粧台の前で髪を梳かしていた千鶴は、何事だろうと俺を見つめる。

「裕樹くん。お客さん——御手洗さんと五ヶ山さんが……」と玄関から母さんの声が聞こえてきた。俺は来客の名を聞くと、疑問を持ちながらも、玄関へと走った。

「お、おはよう」と御手洗が何かぎこちない表情で挨拶する。

「お、おはよう。なんかあったのか？」

俺がそう尋ねると、御手洗と五ヶ山は互いの顔を見る。

そして五ヶ山が俺の顔を見つめ、こう続けた。

「実はね。さつき渚と千恵から携帯に電話があつて――」

話を聞くと、どうやら、生家と酒殿はチアリーダー部の朝練で、学校にはいつもよりも早くついていたらしく、校門の前にはパトカーが停まっていたという。

「まあ、あちらさんは仕事だからな。牛頸と上八の繋がりがある以上は……」

「それはわかつてるけど、でも関係のない人たちから苦情もきてるみたいだよ」

それを聞くと、俺は首を傾げた。

「そりゃ、私と恵子は、牛頸をいじめていた加害者だってことは自覚してる。でも、警察が頻繁に来てるって事は、学校内に問題があるんじゃないかって、保護者の人から連絡があつたらしいの。みんなからメールで教えてもらった」

そもそも、警察が聞きたいのは、牛頸静江と上八瑞希の関係だろう。先に死んだと考えられる牛頸静江の死体はまだ発見されていない。たしか母親が搜索届けを出したのがきっかけだと考えられる。

その矢先に、いじめの主犯格である上八瑞希の水死体が発見された。

だから警察は学校にその事を訊ねにきているんだと思う。

その事は五ヶ山と御手洗もそう考えているようだ。

「それで、保護者はなんていつてるんだ？」

「学校に警察が来るのは、学校に問題があるんだから、さつさと解決しろって」

それを聞くと、俺は溜め息を吐いた。

「一応接点としては、牛頸をいじめていた上八が変死体で発見された。そのことについて、二人がどういう関係なのかを訊ねに来ているだけだと思っただけだな」

「うん。私たちが一昨日警察官に訊ねられたときも、そんな感じだった」

五ヶ山がそう云うや、御手洗は少しばかり考え込むや、

「でも、私たちが牛頸をいじめていたことは既に知ってたんじゃないかしら？」

二人の名前や素性を知っていたとすれば、考えられなくもないか

……

学校に着くと、予想通り、昨日同様、パトカーが校門の前で停まっております、雀居と小笠木が登校している生徒たちに尋ねていた。

俺は鞆から例の写真を取り出す。

「本当にそれを見せるの？」と五ヶ山が尋ねる。

「イヤなら見せねえけど？」

そう尋ねると、御手洗と五ヶ山は互いの顔色を疑ったが、二人とも同意するように首を横に振った。

「それで牛頸さんと上八さんの気持ちかはれるんなら——お願い」

俺はそれを聞くと、写真を手に持ち、鞆を五ヶ山に渡した。渡された五ヶ山はキョトンとした表情で俺と鞆を交互に見渡す。

「ちよつと遅刻するから、鞆だけ俺のロッカーに入れといってくれ」

そう伝えるや、俺はパトカーへと歩み寄った。

「ちよつとすみません。お話があるんですが」

俺が声をかけると、雀居が俺のほうへと振り向いた。

「おや？ 君は昨日の…… 私たちに何か用ですかね？」

雀居は首を傾げながら、俺に尋ねる。

「ここではみんなに迷惑がかかりますし、少しはなれたところで俺は写真を見せる。」

「うんうん。わかりました。小笠木くん。ちょっとここは彼に従いましょう」

写真の意味がわかったのか、ものわかりのいい警官だ。

「で、ですが警部？」

小笠木が困惑を隠せないでいる。

「小笠木くん」と雀居が声をかけると、小笠木は渋々運転席へと乗り込んだ。

俺は開けられた後部座席に乗り込み、雀居は助手席へと乗り込む。パトカーはゆっくりと方向転回し、学校から少し離れた駐車場で停まった。

「それで、先ほどの写真ですけど、もう一度見せてくれませんかね？」

雀居が言われ、俺は写真を渡した。

その写真を見るや、前に座っている二人が声を荒げる。

「こ、こんなことって…… いったいどうしてこんな写真を？」

「知り合いに新聞部のやつがいて、そいつが偶然撮った写真なんだ。被写体は夕日になってるだろ？」

俺がそう云うと、「確かに被写体は夕日になっていますね。それじゃ、本当に偶然撮られたということでしょうか？」

小笠木が雀居に尋ねる。

「それでこれを撮った人は——」

雀居の問い掛けに、俺は首を横に振った。

「これを撮ったやつは偶然それが入り込んだから、画像を見るまでは気付かなかったらしい。それにオリジナルは逆光していて、ただの人影にしか見えなかった」

それを聞くと、雀居は、今自分が見ている写真は、画像編集しているものとわかったらしく、

「恐らく、これは哭浜海岸でしような。そして足場のないところに人が立っているようにも見える。——となると、自殺ではなく他殺

でしょうね」

雀居の話を聞くと、「どうしてこれが他殺だって言い切れるんですか？」と、小笠木が口にする。

「まず、飛び降り自殺をした場合、体は倒れる方向に前のめりしていなければいけませんよね？ でも、この写真を見る限りでは、胸がはつてあるんですよ」

それを聞くと、小笠木は写真を雀居から受け取り、翼々と穴が開くほど見つめた。

「た、確かに、顎は上がっていますし、胸がはつている。それじゃこの写真は、今まさに突き落とした瞬間を撮った写真という事ですか？」

小笠木が雀居に尋ねる。「まあ、そう考えてもいいでしょうね」  
そう云うや、俺を見る。

「すみませんが、この写真、こちらでちょっと預かってもいいですかね？ 鑑識に渡して、解析してもらいますから」

元々そのつもりだったので、俺は二つ返事で了承した。

そうこうしているうちに、始業ベルが鳴り響いた。

「すみません。俺、もう遅刻確定してるけど、行かないわけには行かないんで」

「ええ。こちらこそ、貴重な情報ありがとうございます」

雀居がそう云うや、俺に頭を下げた。

俺はパトカーを降りるや、急いで、学校へと走った。

「ふう……っ」と雀居は窓を開け、紫煙を吹かした。

「どう思います？ 警部」

小笠木がそう尋ねると、「まあ、これで自殺の線はなくなったと考えてもいいでしょうね。写真を見る限りでは、突き落とされたの

が牛頸静江とわかりましたし、重なるようにうしろにはもう一人いるようですし」

「いや、そうじゃなくて……」

小笠木の言葉に、雀居は首を傾げる。

「さっきの少年ですよ。私たちと緊張感もなしに話すなんて、一般人には出来ませんよ」

それを聞くや、雀居は学校の方角に目をやった。

「まあ、“慣れているのがあたりまえですよ。”」

雀居は煙草を口に銜え、物思いにふけた。

雀居はそれ以上は話さなかったため、小笠木はその真意を知る由もなかった。

学校の正門、および裏口は防犯用にと、鉄製の門扉は締め切られている。――が、実際のところ門の高さは2m弱しかなく、はつきりいって防犯にもなりやしない。

一応防犯カメラが設置されているが、俺は仮にもこの学校の制服を着ているし、五ヶ山にお願いして、鞆を教室に持っていてもらっている。

俺は周りに誰もいないことを確認すると、門扉に手をかけ、網目のところに足をかけながら、攀じ登った。

「よつと」

門扉から飛び降り、あたりを見渡す。近くに人の気配なし。

俺は少しばかり背伸びをすると、ポケットから小さな懐中時計を取り出し、時間を見る。

時計は『9時10分』と針を指している。

さてどうしたものかと考えていると――

「これこれ、その君。こんな時間に何をしとるんかね？」

校舎の窓から、女性の声が聞こえ、俺はそっちに振り向くと、  
「今授業中じゃろ？　もしかして遅刻したんか？」

そう訊かれ、俺は素直に頷く。

「仕方ないのう。二時限目までまだ時間はあるし、教室に行くのもあれじゃろうから、ちょっとこっちにきんさい」

老人独特の言い回しだが、女性――椎原教子しいばきょうこの見た目は40代だ。実際42歳くらいだから、年相応といえればそれまでなんだけど。これで校長なのだから、世の中わからない。

俺は校長に従うように、校舎の来客口から中に入り、校長室に入った。

校長室に入ると、テーブルの上にお茶が二組乗せられているのが視界に入り、室内を見渡してみたが、校長以外の気配は特に見当たらず、さっきまで来客がいたのだろうかと首を傾げた。

「えっと、塔原くんじゃったかな？　確かこの前転校してきた」

校長がお茶を入れながら、俺に尋ねる。

「ええ。そうですけど？」

「この学校には慣れたかの？」

「まだ来てから一週間くらいしか経ってませんから、なんとも」

そう答えると、校長は含み笑いをする。

「そうかい。まあゆっくり慣れるといいよ」

そう言われても、もう三年だ。みんな受験とかでそれどころじゃないだろう。

「それで、今日遅刻した理由はなんじゃいな？」

そう訊かれ、俺は返答に困った。理由が警察に牛頸のことを話していたなんて云えんな。

校長は特に深くは訊こうともしない。

「はい。どうぞ」

校長は俺の前に紅茶を出す。ほんのりとジャスミンの香りが漂う。  
「もらっていいんですか？」

「ええ。ちよつと話し相手がほしいと思ってたのよ」

校長はそういうと、小さな金庫から茶菓子を取り出す。

「いいんですか？ 仮にも校長が学校にそんなの持ってきて」

「んふふ。学校には来客も来るでな、茶菓子のひとつくらい用意せんと、商談もうまくいかんでな」

校長はそういうと、袋からクツキーをふたかけ取り出し、小皿に盛る。

俺は少しばかり遠慮すると、「これは二人だけの秘密にしちやるから」といわれ、少しばかり疑いながらも、俺はクツキーを食べた。

「塔原くんと同じクラスにいた牛頸さんも、よう校長室に来とったわ」

その言葉を聞くや、俺は紅茶を噴出してしまう。

「あなた、牛頸さんのことを調べていたようね」

「だ、誰からそんなことを？」

校長はその質問に答えようとしなない。

「まあ、あんなことがあったのだから、自殺しようとしたのも仕方ないのかもしれないけど」

——校長は何か知ってるんじゃないか？

「あの、牛頸さんが自殺したって、どうしていえるんですか？」

「牛頸さんのお父さんが、事業に失敗して自殺したのは知ってるのよね？」

別に隠すことでもないの、おれは頷く。校長はその仕草を見るや、一度ため息を吐いた。

「先生が校長に昇格したのは二年前だから、ちょうど塔原くんが一

年の時くらいになるかしら。その年の運動会に、牛頸さんのお父さんが見に来ていたの。娘を応援する姿が印象的でね。ビデオカメラ片手に、応援席を右往左往してたわ。娘のベストショットを撮ろうとしてるくらいの子煩悩だったわ」

確か牛頸の父親が自殺したのが去年の今頃らしいから、運動会は確か6月に行われるはずだ。

校長の証言は間違いがない。

「それに父兄参観にも来てたからね。とても自殺するなんて思えなかったわ」

校長の言うとおり、妻と娘を置いて自殺するのだろうか？

事業に失敗した責任を感じた牛頸直隆は自殺をした。

自殺した原因は、度重なる責任感によるうつ病によるものだという事になっているが、それがどうも釈然としない。

もちろん俺がまだガキだからというのもあるが、その事件を担当した父さんが、裁判で会社側に賠償金を支払ってもらってるはずで云ってたっけ？

まあ裁判中のことは、たとえ家族でも言えないが、すでに終わってることだから、話してくれたままでなんだろうけど。

それに牛頸静江がどうしてあの時間、哭浜海岸にいたのか。それとその背後にいた人物。

その人物が牛頸静江を突き落としたとも考えられる。

そして上八が水死体で発見されたにも拘らず、牛頸静江の死体が発見されていないのも釈然としない。

水死体をどこかに遺棄したんだろうか？ それも見つかからないような場所に……

「牛頸さんに不審なところはなかったんですか？」

「そうね。お父さんが自殺してからあまり何も変わらなかったわ」

——— どういうことだ？ 少なくとも身内が死んでるんだ、動揺しないのは如何せん可笑しい。

「先生たちはまるで能面みたいだって言ってたのを覚えてるわ。でも、もしかしたら何かのサインだったのかもしれないわね」

校長はまるで悲しむような仕草をする。

能面は無表情を意味するが、能面自体は光の当たり具合によって表情を変える。

能舞台では面を被って演じるため、そういうひとつひとつの仕草で表情を表していると母さんから教えてもらったことがある。

「上八さんと牛頸さんの関係も知ってたんですか？」

「お父さん同士でいがみあっていたことは知っていたけど」

いじめる側とされる側というのは知らなかったんだらうか？ 校長はそれ以外特に気付いてはいないようだ。

まあ、どこの学校でも、いじめなんてない方が可笑しいけど。

「仮に上八さんと牛頸さんが父親のことで言い争っていたなんてことはないんですか？」

「あまり生徒の私情プライベートに關与することはしないからね」

校長は申し訳ないように言う。俺が調べていることを知っての仕草なんだらうか？ ——— となると、校長は協力的ということか？

しかし、そうなると、どうして牛頸がああの時間、あんな場所にいたのが立証出来ない。牛頸が突き落とされたということは、少なくとも誰かがそこにいた。その証拠がわからない。

牛頸と上八が仲がいいとは思えないし、上八が呼び出したとしても、殺されるとしたら上八のほうだらう。

終業チャイムが鳴り、校長は俺を見る。

「そつえばえは？」

「ああ。ちょっと友達にお願いして、教室まで持っていつてもらってるんです」

俺がそういうと、校長はクスクスと笑い出す。

「ど、どうかしたんですか？」

「いえ、ごめんなさい。ほら、教室に行つて」

そう促され、俺は校長室を後にした。

裕樹が校長室を出たのを確認すると、教子はソファに座り、紅茶を一口啜った。

『塔原くんが前の学校で何をしたのかは耳にしている。確かに彼がしたことは厳罰に処すべきことだけど、被害者の教師はそれ以上の処罰を受けなければいけない……』

教子はふたたび紅茶を一口啜る。

『そしてそれは学校側にも責任がある。あんなことをしたのだから、それを隠そうとした学校だって責任を取るべきなんだ』

教子は静かに憤怒の表情を浮かべた。

## 12・違和感

教室へと急いでいる間、ふと保健室が見えた。電気はつけられておらず、仄暗い。<sup>ほのくら</sup>

ドアについている小さな窓から覗き込んでみたが、人の気配はしなかった。

鍵もかかっているから、留守なのだろう。

——ドアをよく見てみると、『御用の方は職員室まで』という張り紙が貼られている。

俺は少し気になりながらも、教室へと急いだ。

教室の扉を開けるや、女子の一人が小さな悲鳴を挙げた。

周りを見てみると、女子が体操服に着替えているというのに気付いたのは、数秒後であった。

「きゃああああああああああつ!!」

興奮しだした女子が、俺に目掛けて物を投げてきた。

「わっ! とっ! あぶねえ!」

俺は慌てて教室を出る。

そういえば今日体育があっただっけ? そう考えながら、同時に体操服を持ってきてないことを思い出した。

まあ、忘れたものは仕様がな。素直に体育教師に話しておこう。そう考えながら、窓から外を眺めると、クラスメイトが体育館の方に入っていくのが目に入った。

体育館でやることがわかるや、俺は逃げるように体育館へと走っていった。

体育館は結構広く、バスケットが三つある。

男子は2チームに分かれてバスケットをするようだ。1クォーターごとに交代していくという感じで進行していく。

女子はバスケットひとつはなれたところで、マット運動をしている。

俺はというと、体操服を忘れた罰として、隅っこで見学させられていた。

「御手洗湊！　いただきます！」

御手洗がマットの角に立ち、右手をピツと上げ、一息入れるや、助走をつける。

そして、側転からバク転、高く跳ね上がって、月面宙返り。着地したかと思いきや、倒れこむと、腕の力だけで、体を起き上がらせ、ゆっくり倒立の形にしていく。数秒停止した後、倒立前転。

その綺麗な演技にも見とれてしまうが、御手洗の豊満な胸に目がいつてしまう。動けば動くほど、ゆれるのだから、気にしないほうが負けな気がする。

バスケットにいる男子も、御手洗の演技に見とれていて（演技というよりも胸にだらうけど）、試合どころではないようだ。

「こらあ。見学だからって、ジロジロ見ない」

五ヶ山が俺に声をかける。

「別にジロジロ見てないだろ？」

「そう？　教室に入ってきたときもそんな感じだったじゃない？」

「あれは……　まあ二時限目が体育だったって忘れてたし、事故だったってことで許してくれねえか？」

俺がそう懇願すると、五ヶ山は人差し指を唇に当て、考え込むと、「よし。それじゃうちのケーキを1ホール買うつてことで、どう？」

「一応言っておくけど、俺もう今月の小遣い死んでるんだがな？」  
その原因を作ったのは誰だ？といわんばかりに俺は五ヶ山を見つめる。

「あ、そうか。それじゃ来月にでも買ってくれたらいいよ。みんなには慌ててきたからって説明しとくから」

五ヶ山はそういうと、一度周りを見渡すや、俺の耳元に口を近づける。

その吐息があたるのでこちょばゆい。

「それで警察はなんていつてたの？」

五ヶ山は俺が警察に写真を見せたことを尋ねる。

「ああ。鑑識に渡して、詳しく解析するってさ。これで牛頸が自殺したという線はなくなった」

「それじゃ殺されたってこと？ いったい誰に？」

それがわかれば苦労しない。

「なあ。あの海岸は海に沈んだら浮かび上がらないって話とかはないよな？」

そう尋ねると、五ヶ山は首を傾げるが、すぐに首を横に振った。

「ううん。あの場所で飛び降りる人がいても、浮かび上がるはずだよ。台風が来ない以上、そんなに波が荒れるような場所でもないし、哭沢女神が泣き女という伝承がある以上、そういうのはないと思う」  
「確かにそうなんだよな。神様のご加護以前に、死体は錘でも着けていない以上、浮かび上がる—— だから突き落とされた牛頸の死体が、いまだに発見されていないのが、一番の謎なんだよ」

俺は少し考えると、「あそこに海草なんてあるのか？ それに絡んでたら」

そう尋ねると、五ヶ山は首を横に振る。

「祠の掃除をする時、岸壁に小船を近づけるから、多分ないと思うよ。あつたとしたらオールやモーターの羽に絡まって身動きとれないだろうから」

「そうになると、やっぱり遺体が浮かんでこないのは可笑しいよな？」  
俺はふと浮かび上がらないのは、服に水が染み込んで重たくなつたという考えが出たがすぐにかき消した。それなら上八だって同じ

ことが言えるはずだ。それに流されて発見されることだってある。

「きゃっ！」

突然女子の一人が悲鳴を挙げ、俺と五ヶ山はそっちを見遣った。倒れているのは確か、四王寺しおうじだっけかな？ その四王寺がマットの上で蹲っている。悲痛な表情を浮かべ、左足を抱え込んでいる。

「四王寺さん。大丈夫？」

駆け寄った五ヶ山がそう尋ねるが、四王寺は痛みで答えられないでいる。

「どうしたんだよ？」

俺がそう尋ねると、御手洗が振り向き、

「えっと、ちよっとマットの技教えてたら——」

御手洗が慌てた表情でそういう。四王寺を見ると、倒れていることから、立ち上がれないということがわかる。

「四王寺、ちよっと手を足からどけてくれねえか？」

俺がそういうと、四王寺は素直に抱え込んでいた足を開放した。

「ちょ、ちよっとなにやってるの？」と女子何人かが抗議するが、気にせず、俺は四王寺の足首を摩ると、特に反応はない。となると、立ち上がれない原因は——

脹脛にそつと触れると、四王寺は顔を歪めるほどに悲痛な表情を浮かべた。

「こりゃ肉離れ起こしてるな」

俺はそういうながら、御手洗を見遣る。

「なあ、いったいどんな技教えてたんだ？」

そう尋ねると、「技って言うより、柔軟体操かな？ 四王寺さん、体固いって自分でも云ってたし」と答えた。

「四王寺、立てるか？」

うしろから女原が声をかける。四王寺は首を横に振った。

「そうか。先生が保健室まで連れて行くから、お前たちは気にせず

授業を続けなさい」

そういうや女原は四王寺の目の前で跪き、肩を貸す。  
四王寺はゆつくりと女原の肩に腕を回すと、顔を歪めながら、立ち上がった。

痛みが走っている左足を浮かばせながら、女原に寄り添うようにしている。

「ねえ？ 保険委員の人もついていったほうがいいんじゃないの？」  
五ヶ山がそういうと、保険委員の奴山が付き添おうとしたが、「大丈夫だ」と女原は断り、体育館を後にした。

「それにしてもすごいね。ちょっと触っただけで肉離れってわかったんだから」

五ヶ山が俺にそう声をかける。

「自力で立ち上がれないってことは、足を怪我したってことになるだろ？ 最初に足首を触ったのは捻挫の可能性があるかの確認。それが無いってことは、脛の肉離れ、つまり攣っていることになる。これは激しい運動とかをすると、筋肉が――」

俺はそう説明するや、ふとある事に思い出す。

「どうかしたの？」

五ヶ山と御手洗が俺を見ながら、首を傾げる。

「教室に入る前、保健室の前を通っただけどき、いなかったんだよ先生」

俺がそういうや、女子生徒の一人が、

「たしか、今日は他の学校の手伝いと研修を兼ねたなにかで、柏原先生、一日留守にしているからじゃない？」

そういうや、もう一人が顔を歪めた。

「奴山、急いで女原と四王寺を追ってくれ！」

俺がそういうと、奴山は困惑した表情を浮かべる。

「可笑しいだろ？ 生徒ならまだしも、教師が保健室に先生がいないことを知らないなんて」

「そうね。それにあの先生変な噂があるし」

五ヶ山がそういうと、奴山は急いで体育館を後にする。

「変な噂？」

俺がそう尋ねると、「あの先生、執拗に女子に声をかけたりするし、去年までいた志登まどか先生が辞めてるんだけど、その原因が女原先生にあるって」

そうこう話しているうちに、奴山が戻ってきた。

「た、大変だよ。先生と四王寺さん。保健室通り越して、空き教室に入ってた」

急いで戻ってきたのか、奴山はゼエゼエと息を整えながら伝える。「どうしてそんなところに？ 普通だったら職員室に入るんじゃないの？」

「私もそう思ったけど、見向きもしないでそのまま入ってた」  
俺はそれを聞くと、体育館を後にした。

女原に抱えられるように四王寺は保健室に連れて行かれると思っていた。

しかし、女原の足取りは保健室の前で止まらず、そのまま階をふたつ——3階へと上っていく。四王寺はどうして保健室に行かないのかを女原に尋ねた。

「今日は柏原先生お休みでな。先生が粗方救急道具を預かっているんだ」

女原はそういいながら、四王寺を誰も使っていない空き教室へと連れて行く。

3階は理科室や家庭科室などの特別室がある棟と、中庭を挟んだ対面に酒殿がいる一年の教室があり、それを渡り廊下で繋がって

る。1、2階も同様の構造である。

女原はズボンのポケットから教室の鍵を取り出し、鍵を開けた。何ヶ月も使われていない室内は、湿気に近い匂いが漂ってくる。

「先生。あの……」

「四王寺、その椅子に座りなさい」

女原は隅に置いてある机一式を指差した。

「で、でも……わたし……」

四王寺は自分は怪我をしているから、そこまでいけないと言おうとした。

「何をしている？ 足がなければ、腕を使えばいいだろ？」

そついうや、女原は肩を貸していた四王寺を突き倒した。

「きゃっ！」

ドサツと倒れ込んだ四王寺は何が起きたのかわからないといった表情で女原を見やった。

「どうした？ 怪我を治したいんだろ？ だったらこのまま倒れた状態でやつてもいいんだぞ？」

四王寺は一瞬戸惑ったが、這い蹲ってまで机にいくのもどうかと考え、その場に動こうとしなかった。

それを見た女原は、後ろ手で教室の鍵を閉めた。それは微かに聞こえる程度にゆっくりと慎重に閉められたため、四王寺は気付けなかった。

女原が跪き、四王寺の左足を摩る。

「——っ！」

まだ痛みがあり、四王寺は悲痛な表情を浮かべた。

「こりゃ、酷いなあ。まったくどうしてこんな事になったんだ」

女原は男子がやっていたバスケの審判をしていたため、詳しいところは見ていない。

実際、湊が教えていたのは前方倒立回転であった。倒立の際、ピ

ンと足を伸ばさなければ綺麗に見えないため、湊は四王寺にそのことを注意していた。肉離れとも言われる、脛の筋肉が攣る痛みは、足を伸ばしたため、筋肉が急激に引っ張られたことが原因である。

うつ伏せに寝転がされた四王寺は、左足に触れる女原の温度を肌で感じとる。

女原の手はゆっくりと摩りながら、脛よりもお尻の方へと上がっていく。

「っ？　せ、先生？」

四王寺がそう言つと、女原は脛を強く掴んだ。そのことで激痛が走り、四王寺は声を殺した。

「静かにしろ。先生が治してやるといってるんだ」

女原は声を荒げながら、四王寺の左足を撫でる。

吐息をたてながら、四王寺は女原を見やるや、ゾツとした。

——そこにいたのは、涎を垂らした鬼であつた。

### 13・嫌悪

『ああつ！ くそつ！ 奴山から場所教えてもらつとけばよかった』  
俺は保健室の前で、辺りを見渡しながら、焦っていた。

女原と四王寺が空き教室に入っていたところまで聞いて飛び出したのは拙ますかった。

保健室は1階にあるため、どの階のことは行ってるのかわからなかった。

それに体育館で女原に変な噂があるって云つてたことも気になる。

『約束したんだ。俺は—— 同じ目にあっている子がいたら助けてほしいって』

俺は昔のことを思い出す。はつきり云って俺は間違ったことをしていない。

もちろん俺の判断でのことだが、世間一般的には赦されないことだろう。

でも、俺は自分で間違ったことはしていない。

「裕樹くん」

「五ヶ山、それにみんなも」

奥から五ヶ山と御手洗を含めたクラスメイトが保健室に駆け寄る。

「奴山っ！ 空き教室どこだ？」

俺は奴山の肩を掴んで、問いただす。

「さ、三階の空き教室。近くにある一年生のクラスは運動場にいつてるから、教室で物音を立てても誰も気付かないはずだよ」

俺はそれを聞くと、本当かと尋ねる。

「さっき廊下を走ってる時、運動場で一年生が授業してたのが見えたり、それに教室の壁は厚いから、声が聞こえないかもしれない」

クラスの人間がザワザワと騒ぎ始める。

「おい、その教室の鍵はないのか？」

「あるにはあるけど、職員室にどうやって知らせるんだよ？」

男子生徒がそう尋ねる。

「そんなの決まってるだろ？ 怪我をした四王寺を女原が保健室に連れて行かず、三階の空き教室に――」

俺はそこまで言うと、言葉を止め、「信じるわけねえか――」と呟く。

「まだ授業中だし、俺たちが勝手に体育館から出たと女原が証言してみろ？ まだ授業中で廊下に人は歩いていない。つまり、女原と四王寺を見た人間はいないってことになる」

「つまり、私たちが二人を探していることを、女原先生が証言しなかったら」

「ああ。俺たちが授業をボイコットしたってことになって、処罰を受けるのは俺たちのほうになる」

俺はその場に座り込んだ。それを五ヶ山と御手洗が心配そうに見つめる。

「俺さあ、前の学校で先生をぶん殴ってるんだよ」

俺はわざとみんなに聞こえるように呟いた。

「それが原因で一週間の停学だったんだけど、もうこの町に引っ越すことが決まってたから、あまり気にはしなかったし」

俺の言葉にみんなが驚いている。

「そ、そんなことしてるのかよ？ おまえ……」

「人は見かけによらないな？」

クラスメイトのざわめきが聞こえてくる。

「でも、理由があって殴ったんじゃないの？」

五ヶ山がそう聞くと、俺は彼女を見遣った。

その表情は哀れむような感じた。まるで彼女が見せたときと同じ表情。

「だよね？ まだ付き合ってたんなら経ってないけど、理由もなしに人を殴るとは思えないし」

御手洗も五ヶ山と同様、俺を哀れむような表情を浮かべながらいった。

「理由はさ、納得がいかなかっただけだ」

「どういうこと？」と奴山がそう尋ねる。

「前にいた学校に、すんげえ馬鹿みたいに派手な女の子がいてさ。そいつ、校則破ってたまで髪を茶髪にしたり、体を焼いたりして、そりゃガンクろって言葉は古いかも知れねえけど、本当にそんな感じだったんだ。遊ぶ友達関係もなんかそんな感じだった」

俺は吐き気を我慢しながら、言葉を一つ一つ丁寧に口にしていく。「でもある日、そいつはある教師からセクハラを受けていたんだ」

その言葉を聞くと、五ヶ山と御手洗、そしてクラスメイトのみんなが言葉を失っていくのが、肌で感じ取れた。

「せ、セクハラって、それって犯罪じゃない？」

クラスメイトの一人がそう言葉を発する。

「ああ。犯罪だよ。でも、誰もそのことを言おうとしなかった」

「どうして？ だって一歩間違えたら――」

「俺が前に通っていた学校は進学校でな。みんな馬鹿みたいに勉強できた。当然俺やそいつはいつもテストがあるたびに馬鹿にされてきた。あいつらは支障をきたすのが怖かったんだ」

俺は口の中に胃液がこみ上げていくのを我慢する。

「だ、大丈夫？ なんか顔色悪いよ？」

御手洗が俺に声をかける。

「あ、ああ。大丈夫だ。話を続ける」

俺は一度深呼吸をし、気持ちを整える。これは俺の中ではもう終わったことなんだ。

もうあいつは——俺の初恋の彼女は——

「女の子へのセクハラは誰も注意しなかったことで、どんどんエスカレートしていった。よく補修を受けさせられて、そのたびに何かされていたんじゃないかって心配していたけど、俺も自分のことで精一杯だったから何も出来なかった」

今思えば、俺が何かしていたら、彼女はあんなことをしなかったんじゃないかと、内心後悔している。

「その子、今どうしてるの？」

五ヶ山は申し訳なさそうに尋ねる。おそらく最悪なことを想像し、尚且つその答えを知りたいがためだろう。

「——自殺したよ」

「じ、自殺？」

「あいつの家、高層マンションでさ、12階のテラスから飛び降りたんだ。死体は顔が潰れて、見るに見れなかったけど、今でも鮮明に覚えているんだ」

「せ、先生は？ 学校は何か言わなかったの？」

五ヶ山がそう尋ねると、俺は首を横に振った。

「あいつの自殺した原因はノイローゼによるものと診断されたんだ。そりゃテストの点数は低かったし、よく残されていた。でも、それはあいつがセクハラを受けていた証拠でもあったんだ」

俺は下唇を噛み締める。

「でも、あいつを殺した学校は！ あろうことが矛先を自分たちにじゃなく、あいつに向けたんだ！ 自殺したあいつは普段から不良で、セクハラしていた教師を誘惑していたって」

「そ、そのことを誰も疑わなかったの？」

「ああ。疑わなかった。学校の関係者誰一人！ でも、俺はあいつと小学校からの付き合いだったから知ってるんだよ。あいつが人を誘惑するなんてこと出来ないって」

「どうしてそんなことがいえるの？」

御手洗がもつともな事を言う。

「あいつ、小学校のころ、馬鹿みたいに素直でさ、人を騙すことなんか出来なかったんだよ。人の言葉は素直に受け止めるから、よくみんなから騙されていたんだ。でも、あいつはそれを知っていても、あえて道化師になっていた。俺はそんな彼女が羨ましいと思っていた。だから人を騙すなんてことはしないと思っていたかつたし、信じてやりたかつた」

俺の話を聞きながら、固まったようにみんなが俺を見つめる。

「教師は何食わぬ顔して、学校に平然と来てた。それどころか疑われたことで遺族に損害賠償を迫り及したんだ。世間体にも彼女が自分で撒いた種だつて、誰も心配しなかった。両親は賠償金を支払い、世間体を気にして――」

「それ以上云わないで！ 云わなくても、なんとなくわかるから」  
震えるようにクラスメイトの女子たちが声を荒げる。

「そしてそのセクハラ教師は、また違う女の子をセクハラし始めた。単位をあげるとか、勉強を教えてやるとかそういつてな」

「でもよ？ そんなことしてたら、みんな言うこと聞かないんじゃないのか？」

「勉強できなかったら、それだけで疎外されていた学校だぞ？ それにあいつがセクハラしてたのは赤点ぎりぎりのやつばかりだった」  
「それじゃ、もしかしてセクハラされてた女の子たちは云うに言えなかつたつてこと？」

奴山がそう言うと、俺は頷く。

「俺はあいつが自殺したのは、誰もあいつを助けてやれなかったことにあるんじゃないかって思ってる。だから、牛頸が自殺しようがしてまいが殺したのはクラスメイトだろ？」

「な、何でそんなこと急に言い出すんだよ？」

「でも、塔原くんの話聞いてたら、そう感じ取れなくないかも」  
「なに言ってるんだよ？ 全然関係ない話じゃないか？」

「そりや関係ないかもしれないけど、でも誰かが彼女を助けていたら、私たちが牛頸さんをいじめていなかったらこんな思いしなかったんじゃないかな？」

「塔原くん？ 私たちは牛頸さんをいじめていた。そのことはクラス全員が知っていたし、紛れもない真実。でもそれは証言できないんじゃないの？」

高平がそういうと、「どういうことだよ？」と男子が聞き返す。

「いま女原先生と四王寺さんを探している私たちと同じよ。証拠って言うのは見つかって初めて証拠って言える。でも人の口は実は証拠にはならない。それを証明するものがあって初めて証言といえる」

高平の言うとおり、事件等において、証言は何よりの証拠だが、それを証明するものがなければ宝の持ち腐れだ。

「つまり私たちが言わなかったら、証拠にもならないってこと？」

御手洗はそう呟くと、急に俺の制服の首元を掴んだ。

「みんななにやってるの！ 私たちは女原先生と四王寺さんを探してるんですよ？ 場所がわかったんなら、早く行かないと」

「そ、そうだな」

俺は立ち上がるうとしたとき、我慢していた吐き気が一気にこみ上げてきた。

「ちよ、ちよつとごめん。みんな先に行つてくれ」

俺はふらふらと目の前にあったトイレに入り込んだ。

「うげえっ！ がはあっ！ ごほっ！ げえはっ！」

咳き込むように汚物を個室トイレの中で吐き出す。

口の中には気持ち悪い臭いが籠り、それがさらに吐き気を催す。

汚物を流し、袖で口を吹きながら、手洗い場の水で口を濯ぎ、吐き出した。

「裕樹くん、大丈夫？」

トイレから出ると、待っていたのか五ヶ山が俺にハンカチを差し出す。

「ねえ、どうして牛頸さんのことを執拗に気にしてたの？」

「どうしたんだよ？ 何でそんなこと」

俺が聞き返すと、五ヶ山は真剣な表情で俺を見つめた。その目からはうつすらと涙が浮かんでいる。

「昔の話をしていたとき、裕樹くん震えてた。何かを我慢してるみたい——」

「ああ、まあ……」

俺は五ヶ山との視線を逸らす。

「牛頸がいじめにあっていたって聞いたとき、他人事じゃないって思っただけだよ」

「どういうこと？」

五ヶ山はそう聞き返す。

「さっき、前の学校で自殺した女の子と同じ小学校だったって話しただろ？」

そう訊くと、五ヶ山は頷く。

「あいつ自分の学力を視野に入れないで、俺と同じ私立に通うっていつてさ。俺だって父さんに言われて入っただけで本当は小学校の友達と同じ中学に行きたいと思ってたんだ」

俺は階段を上がりながら、五ヶ山に昔話をする。

「でも、あいつら俺と雫……あ、さっきの話に出てきた自殺した女の子な。いじめてたやつらは、俺と雫が自分たちよりも劣っているってわかったとたん、手の平返したようにいじめだしたんだ」

前を歩いていた五ヶ山が立ち止まり、俺のほうを振り向いた。

「それって……牛頸さんと上八さんの関係と」

「ああ。似てるって云えば似てるけど、あいつらはただたんにストレスを発散させるおもちゃが欲しかっただけだった—— 今考えて

もそうとしか取れなかったよ」

「私たちも上八さんから命令されていた。ううん。もしかしたら心のそこではそうだったのかもしれない」

五ヶ山は顔を手で隠す。

「もう謝っただろ？ 後悔してるんだろ？ だったら前を向けばいい。過去は変えることは出来ない。でも二度とそんなことはしないっていうのは未来の話だろ？」

俺は五ヶ山の頭をポンと叩き、彼女をその場に置いた。

——そうだ。だから俺は二度と同じ思いはしたくないし、みんなには彼女と同じ思いをして欲しくないんだ。

そう思いながら、俺はみんながいる空き教室へと向かった。

四王寺は女原から逃げるように、地べたを這い蹲る。その表情は泣き崩れ、恐怖によつて歪みきつている。

「どうした、四王寺。逃げてたら治療が出来ないだろう?」

女原はそういいながら、ゆっくりと四王寺に近寄っていく。

「や、いいやあ」

四王寺はつわごとを発するように、女原が逃れようとするが、女原が何も考えずに四王寺を追ってはいなかった。

四王寺を空き教室の隅っこに追いやり、逃げられないようにする。

「ほら、鬼ごっこはもうおしまいだ。おとなしくしなさい」

じわりじわりと近寄ってくる女原から逃げようとし、後退りする四王寺の背中がロッカー棚にぶつかる。

「や、やだあ……」

這い蹲るようにゆっくりと立ち上がり、四王寺は隙を見て逃げようとするが――女原がそれをゆるすことはなかった。

女原の横をすり抜けようとした四王寺の腕を捕まえ、その場に押し倒した。

「まったく。こんなに汚れて…… どうせお前も今時のガキと一緒になんだろう?」

女原はうつ伏せになっている四王寺の上に馬乗りになる。その重みで四王寺は小さな呻き声を挙げた。

女原の手の平が四王寺の脹脛からお尻の方へとゆっくりと摩る。

「しかし、暑いなあ」

女原はシャツを脱ぎ捨てて。そしてうしろから四王寺の小さく膨らんだ胸を揉もうとするが、四王寺がうつ伏せになっているため、うまく手が回しこめない。

「四王寺、ちょっとこっちを向いてくれないか？」

女原がそうお願いするが、逃げることに精一杯である四王寺が言うことをきくはずがない。

「ちよっとこっちを向くだけでいいんだ」

そう言いながら、女原は四王寺のお尻を撫で回し、ついにはその手の中に入っていく。

それにビックリし、四王寺は悲鳴を挙げた。その反動で上半身が浮かび上がるや、女原は四王寺を羽交い絞めにしながら、立ち上がった。

「や、やめてえ……」

四王寺は体を震わせる。

「いいね、いいね。」C《女子中学生》の悲鳴ほど、そそのものはないね」

女原は歪んだ笑みを浮かべ、片手で四王寺の両手首を掴みあげ、あいた手で四王寺の胸を撫でまわしていく。

「四王寺、ちよっとこっちを向け」

そういわれるが、四王寺は恐怖で女原を見る事が出来ないでいる。

「先生！ 一体何やってるんですか？」

廊下から、御手洗や奴山、高平が窓越しに女原に声をかける。

それを見るや、女原は小さく舌打ちをする。

「お前たち、何をやっている？ まだ授業中じゃないのか？」

「なっ？ それはこっちの台詞よ！ あんただって可弱い女子中学生になんて事やってるの？」

高平がそういうや、

「先生はただ単に四王寺の治療をしていたただけだ。ちょっと暴れだしたのを止めていた」

誰がそんなことを信じるかといわんばかりに、御手洗と高平が露骨に憤怒の表情を浮かべ、女原を睨み付けた。

「何だその目は？ お前たち、あの事がばれてもいいのか？」

女原には秘策があった。それは彼女たちが上八とともに牛頸をいじめ、死に追いやったことである。

——しかし、今となつてはそれは意味のないものであつた。

「言いたいのなら勝手にどうぞ。私はそのことを認めるし、逃げようとも思っていない。それに、牛頸の死は自殺ではなく、他殺。それは警察が証明してくれる」

「な、何を言っている？ お前たちがいじめていたせいで、牛頸は自殺したんだろ？」

御手洗の発言に女原は動揺する。

「それは本当だ。そもそもどうして後になって死んだ上八の死体だけが発見されたのか」

教室の横にある階段から、裕樹の声が聞こえ、クラスメイトたちがそちらを見やった。

「女原先生？ 一応確認しておくけど、どうして牛頸が自殺したなんて考えてるんだ？」

俺は先に行っていたクラスメイトたちと合流し、窓越しから女原に尋ねる。

「それはお前たちが上八と一緒にになって牛頸をいじめていたからな。自殺して当然だろ？」

「ところがどっこい。牛頸と上八の父親は会社の上司と部下の関係で、二人はよくそのことで喧嘩をしていた。去年牛頸の父親が自殺したことで、牛頸は精神的に傷を負ったんだ。上八はそれを心配して、あえていじめることにした」

俺がそう言つと、みんなが戸惑うようにざわめき始める。

「いじめることにしたって…… どういう意味？」

奴山がそう俺に尋ねると、俺は携帯をみんなに見せた。

「さつき親父から連絡が入ってな。実は牛頸静江と上八瑞希自身はすごく仲がよかったんだ。親がそんな関係にも関わらず、娘である自分たちだけ仲がいいのはいけないってことでな。表面では上八瑞希はみんなを誘導し、牛頸静江をいじめるようにした。でも、いじめたあと、必死に謝っていたっていうのを…… あんたが去年辞めさせた女性体育教師が証明してくれたよ」

俺は体育館から保健室へと走っている間、父さんに急いで調べて欲しいと連絡を入れた。

それは体育教師が一人辞めさせられていることだ。

教師というのは、人事異動がなければ、学校を辞めることはまずない。

それ以外だと、何か事件を起こしたくらいだ。

だけど、去年辞めた体育教師は女性で、寿退社というわけではなかった。

なら考えられることとしたら、去年何かを知って、責任を負わされたってことになる。

「去年までいた志登まどかは、上八と牛頸の関係を知っていた。そして牛頸の父親が自殺したことで、牛頸静江が普段とは違っていたのに気付いていたのは、教師では校長と志登まどか、そしてあんただけだった」

「なにを言っている？ 牛頸は何も変わっていなかったぞ？ むしろ普段から冷血な女だったからなあ。自分の父親が死んだというのに、平然と学校に来ていた」

女原は困惑するように怒号を挙げた。

「身内が死んで、平然としてられるやつなんていないんだよ！ だから上八は牛頸からのお願いを聞いたんだ」

「お願いってどういうこと？」

御手洗が俺に尋ねる。

「今までどおり、険悪な関係でいよう。それが表面上での二人だと牛頸は考えたんだ。そして上八はそのことを志登まどかに相談した。けどあんたはそれを逆手に取ったんだ」

そう言うのと、女原は露骨にいやな顔を浮かべた。

「まったくさつきから何を言ってるんだ？　まるで先生が牛頸を自殺に追い込んだみたいに」

「追い込んだんじゃないくて、あんたは俺たちクラスメイトが牛頸をいじめていたことを利用し、そのことで牛頸を哭浜海岸に呼び寄せた。そして呼んだだけで実際には何もなかったんだ」

「呼んだだけって、どういうこと？」

五ヶ山がそう言うのと、「あそこは自殺の名所だっていうのを、五ヶ山の親父さんが云ってたろ？　そこに呼べば、父親の自殺や、クラスメイトからのいじめ。そのことで精神を病んでいる牛頸が投身自殺すると思ったんだろうけど。ところがどっこい、自分からいじめてほしいと願っていた彼女が――自殺するはずがない」

俺がそう言うのと、クラスの何人かがうなずくように考え込む。

「確かに、自分からお願ひしてる人が、それを理由に自殺するなんて考え難いわね？」

高平と奴山がそう言うのと、

「それに投身自殺したのに、その死体が見つかっていない。その後上八の水死体が発見されているのにだ」

「あ、それって、さつき、私に聞いてたこと？」

五ヶ山が体育の授業中、見学していた俺と話していたことを思い出す。

「ああ。海に落ちた死体は腐敗ガスで体が膨らんで浮かび上がる。浮かんでこないってことは海藻や岩などに絡まっていると考えられる。だけどそれも時間が経てばほどけるが、行方不明から十日経っているのに、発見されていない。そうなると投身した後、死体はどこに行ったと思う？」

俺は窓を目の前にする。

「女原っ！ どうせこの教室の鍵はお前が持つてるんだろ？」

そうでなければ使っていない教室が開いているとは思えない。

「先生！ もう逃げられないのよ？」

「お前たち！ わかつてるのか？ こんなことしてただで……」

クラスメイトと女原が口論していく中、俺はポケットからハンカチを取り出し、それを右手に巻いた。

「なあ、責任を感じてるなら、俺のお願い聞いてくれないか？」

そう言つと、クラスメイトは俺を見やる。

「な、何をするんだよ？」

俺は耳打ちをするように声を潜める。

「ちよつとみんなにカンパしてほしいんだよ。2万円くらい」

「そ、そんな大金、何に…… ってまさかっ！？」

察しのいい五ヶ山が驚く。

「確かに緊急事態だし、そうしないといけないのはわかるけど」

「おい、何をしようと思ってるんだよ？」

「——わかった。私たちも責任を負う。それがクラスメイトだもの  
何人かは納得しなかったが、俺はみんなを少し離れさせる。」

「女原っ！ 怪我したくなかったら、離れてた方がいいぞ」

俺はそう告げるや、女原は困惑した表情で首を傾げる。

——窓が割れる音が盛大に響き渡っていく。  
「なっ！」

女原は驚いた声を挙げるが、すでに後の祭りだ。

鍵というのは別に扉だけじゃない。窓にだって鍵はついている。

そしてその鍵を開けるには、単純明快、鍵の近くにある窓ガラスを割ってしまえばいい。

学校の窓は弁償されるだろうから、みんなから二万円カンパして

もらいたいとお願いしたのはそれが理由だ。

俺は割れた窓から手を入れ、窓の鍵をはずし、そこから教室内へと入り込む。

「く、くるなっ！ 器物破損で訴えるぞ！」

「ああ。いくらでもいいっていいぜ？ でもなあ、てめえが四王寺に今やっていたことに比べたら、窓ガラスの弁償なんて痛くも痒くもねえんだよ！」

そうだ。俺は金を払うくらいなら痛くもない。本当に痛いのは――誰かを失うことだ。

「くっそおーっ！」

何を思ったのか、女原は捕まえていた四王寺の首に腕を回す。

「塔原っ！ そこにとまれ！ それ以上動いたらこいつを殺すぞ！」  
女原は四王寺の首を締め付ける。

「せ、せんせい…… やめて……」

四王寺がそういうが、「うるさい。そんなに死にたいのか？」

もはや混乱していて、何を云っているのかわからない。

「もう終わりだ女原。さっさと彼女を解放しろ」

俺はゆっくりと近づいていく。

「おい。人の話を聞いているのか？ それ以上近づいたら」

女原は四王寺の首を絞めようとする。

「いったよな？ もう終わりだっ……」

俺がそう言うと、突然警報機が鳴り響いた。

クラスメイトの一人に、俺が窓を割ってから三十秒後、警報を鳴らすようにとお願いしていた。

「さあ、これでお前が何をしているのか、この学校全員に知れ渡った」

俺がそう言うと、女原は観念したのか、四王寺の首から腕を外した。

「はあ。先生はなあ、つかまるわけにはいかないんだ」

そういうや、女原はベランダに出ようとするが、それを四王寺が止めた。

「は、はなせえっ!」

女原は四王寺の掴んだ腕を蹴り、離そうとするが、四王寺は必死にそれに耐えている。

「女原あっ!」

俺は目の前に回りこみ、女原の顎を殴り挙げた。

「がはあっ!」

顎殴ったことによつて起きた振動で、脳震盪を起こし、女原は崩れるようにその場に跪き、そして倒れた。

「げえほっ! げほっ!」

必死だったのか、我にかえるや、四王寺は咳き込む。

「大丈夫か?」

俺が声をかけると、四王寺は俺を睨みつける。

俺は一瞬途惑ったが、その表情は徐々に崩れていき――そして

……

「うわああああああああああっ!!」

彼女の泣き崩れた悲鳴が、教室内に響き渡った。

## 15・取引

パンツと机を叩いたような音が、生徒指導室の室内で響き渡っていく。

「どういうことが、ええ！ 説明しいやあ！」

生徒指導担当の神松しんしょうが怒声を張り上げる。

「説明も何も、二時限目の体育の授業。マット運動をしていた四王寺が肉離れを起こして、それを女原が保健室に連れて行こうとした。けど、女原は保健室ではなく、三階の空き教室に連れ込み、淫らな行為をしようとした」

俺がそう説明するが、頭に血がのぼっているのか、神松は聞く耳を持たない。

「今日は柏原先生がいないんだ。女原先生は職員室に行こうとした」  
「確か、保健室と職員室は目と鼻の先だよな？ 何でわざわざ三階に上がる必要があるんだ？」

「女原先生も何か考えがあつてのことだろう？」ともう一人、確かに二年の三雲みくもについて教師だ。

その三雲が言うには、保険室の担任が不在の場合、職員室に行かなければいけないことになっている。もちろんクラスの保険委員か、もしくは付き添いがいなければ駄目。

そうしないと抜け出す恐れがあるからだそうだ。

「それにお前は、窓ガラスを割っているんだ。それだけでも大罪なんだぞ？」

三雲の言葉を見無視するように、俺はパイプ椅子の背凭れに深々と腰を下ろすと、自分の右手を見た。割れたガラスで拳は痛々しく切り刻まれている。

「だったら、あんたたちは、襲われた四王寺がどうなってもよかつ

たつて言いたいのか？」

睨み付けるように俺は神松と三雲に訊ねる。

「ど、どうなるって…… そりゃ怖くて、学校には行けなくなるだろうな」

三雲は少し視線を逸らすや、口籠るように答える。

「襲われるつてのは、他人が思ってる以上に怖いんだよ。あんたたちは襲われたことがないからわからねえんだろうな？」

「こいつっ！？ 言わせておけばっ——」

神松は俺の胸倉を掴んで、睨みつけた。

「いやいや、待て待て、ここは穏便にいきましょう」

三雲が神松を宥める。そして三雲が耳打ちをするや、神松は俺を一瞥する。

「学校の備品のみならず、教師に対する暴行。塔原、確か前の学校でも同じことをして停学になったそうじゃないか？」

三雲が俺にそういうが、「ああ、そうだよ。それがどうかしたのか？」

そう答えると、三雲と神松は反応に困った表情を浮かべた。

弱味を握つてのことだろうが、俺にとって、それは終わったことだし、それがあったからこそ、俺は彼女に罪滅ぼしが出来てるんだ。たとえ、それが世間一般的に考えて、おかしい事であったとしても、罰せられるべき人間は罰せられなければいけない。

憤怒の表情を浮かべる、三雲と神松はなにやら考え始める。

「そつえば、塔原の父親は検視官だったな。職権乱用で事実を有耶無耶にしてるんじゃないのか？ もしかしたら停学じゃなくて、退学。殴られた教師も半殺しの病院送りだった」

「調べたかったら勝手にどうぞ。でもなあ、俺の親父はどこかの馬鹿みたいに、職業を乱用するほど、落ちぶれてねえよ！」

俺がそう言うと、神松は椅子に座った。

「塔原、証拠はないんだろ？ 女原先生を殴ったっていう証拠が――」

蹲った神松がそう俺に尋ねる。

「なにが知りたいん？」

俺がそう尋ねると「学校側からしても、今回の件は穏便に済ませたいんだ」

「つまり、具体的にはどういうことだ？」

「お前は学校の備品を壊し、先生に暴力を振るった。それによってお前は停学処分になった」

「ちよつと待てよ？ 一番大事な部分が残ってるだろ？ 女原が四王寺にセクハラをしていたことや、去年辞めた教師のことも――」

三雲がスツと立ち上がり、俺に近づくや、

「それは穏便に、お前の心の中にしまつといてくれや？ そうすれば丸く収まつ――」

三雲の言葉が言い切られるのを待たず、気付いたときには三雲をぶん殴っていた。

「お、おまえ！ 何をしている！」

神松が俺の背中に回りこみ、羽交い絞めにする。

「好い加減にしろよ？ それでデメエラはいいかもしれねえけど、やられた四王寺《本人》はどうなる？ もしそれが原因で、トラウマになっていたら？ その後の人生でどうなるのか、考えてもみやがれ！ その場その場の考えなんてなあ、何の役にもたちやしねえんだよ？ 教師だったら、見通せるくらいの力量を見せやがれってんだ！」

「だがな、先生たちは女原先生が、女子生徒に暴力を振るっていたのをこの目で見ていない。すべてはお前の推測じゃないか？」

「あれだけ堂々と見られてるんだ、それが何よりの証拠だろ？」

「先生たちはお前が空き教室の窓ガラスを割り、女原先生に暴力を振るった。そこまでしか知らんのだ」

神松がそういつた時だった。

「証拠ならここにあります」

生徒指導室のドアが開くと、五ヶ山と奴山の二人が入ってきた。よく見てみると、廊下のほうにも俺のクラスメイトが何人かいる。

「何だ、お前たちは？ まだ授業中だぞ？ さあ、早く教室に戻るんだ」

神松は俺を解放すると、クラスメイトたちを教室に帰そうとする。「俺たちはこの目ではつきりと見てるんだ。女原が四王寺に暴行を加えていたことや、絞め殺そうとしていたのも」

「何を言っている？ 仮にも聖職の立場である教師がそんなことをするわけがないだろう？」

神松が呆れた表情を浮かべる。

「それに、塔原が教室の窓ガラスを割ったのだって、閉められた教室の鍵を持っていたのは女原だったから、やむをえず、窓ガラスを割って窓の鍵を開けたんだ」

「それじゃ、女原を殴ったのも仕方なくか？」

「それは助けるために決まってるだろ？ 誰も好んで危険な目に遭いたくなんてねえよ」

そういうや、神松は俺に詰め寄ろうとすると――カメラのシャッター音が聞こえてきた。

「先生たちは、裕樹くんが女原先生を一方的に殴った。そう考えるんですよ？」

「ああそうだ。お前たちが女原先生を誑かし、ある事ない事言いくるめたんだろ？」

三雲がそう言つと、御手洗と奴山は互いの目を見るや、

「証拠ならここに、何人かの生徒が、廊下から教室を撮影してます。その時に一部始終を見てくれれば」

神松と三雲が互いの目を見ると、御手洗に見せてほしいとお願い

する。

御手洗は素直に自分の携帯を渡した。

「なるほど—— たしかにセクハラをしていたという証拠にはなるが、徹底的なものにはならないな」

そう言われ、御手洗は首を傾げる。

「そもそも、襲われた女子生徒は、本当に足を怪我していたのか？」

三雲はそういいながら、御手洗と奴山を一瞥する。

「塔原裕樹。お前は二週間の停学だ」

「ちよつと待てよ？ 女原が四王寺にしたことに対する謝罪はねえのか？」

「証拠がなければ、何も出来ない」

神松の言葉に、御手洗は「証拠ならここにあるじゃない？ 女原先生が四王寺を襲っていたことや、殺そうとしたこと。これが何よりの証拠よ」

「わかつていないな。そうだ、いいことを教えてやろう。お前たち、『美人局』<sup>つつもたせ</sup>という言葉を知っているか？」

神松がそう尋ねると、

「女がかもになって、男性を誘惑し、男性が女に連れて行かれた場所です。待っていた、女の仲間である男が、男性を脅し金目のものを盗み取る——という意味でしたね？」

校長が、神松の問いかけに答えるように、生徒指導室へと入ってくる。

「ですが、四王寺さんの話を聞いた関口先生からの連絡では、四王寺さんは体育の授業、肉離れを起こしていた。それに、腕に打撲の痕があったそうですよ」

「それは、逃げようとした女原先生の足を、四王寺さんが捕まえて、その時に作られたんでしょうね？」

校長は奴山の言葉に答える。

「女原先生の件は、教育委員に連絡をし、然るべき対処をしてもら

います。もちろん、それを隠蔽しようとしたあなたたちもです」

校長は三雲と神松を冷たい目で一瞥する。その表情は哀れんだような、複雑な表情だった。

雀居と小笠木は、裕樹から受け取った写真を手に、牛頸静江の家へとやってきていた。

「またあなたたちですか？」

玄関先で頂垂れた夏海が雀居と小笠木を睨むように見上げながら言った。

「ええ。ちよつと娘さんのことでわかったことがあるんですよ」

「娘は自殺したんです。それ以上なにがあるんですか？」

夏海は怪訝な表情を浮かべながら、雀居を睨む。

「自殺ではなく、他殺だったからですよ」

雀居の言葉に、夏海は首を傾げた。

「実は昨日、ある方から娘さんが飛び降りた瞬間を捉えた写真をいただきましてね。鑑識に急いで調べてもらったんですよ。そしたら――」

「う、写っていたんですか？　む、娘を殺した犯人が」

夏海は半狂乱になり、雀居に詰め寄る。「落ち着いてくださいな、その事で話があるんですから」

「は、はやく。早く教えてください。娘は誰に殺されたんですか？」

雀居は小笠木を一瞥する。そして――溜息を吐いた。

「それよりもまず、父親である直隆氏が亡くなった理由を聞かせてくれませんか？」

その言葉に、夏海はキョトンとする。

「な、何を言ってるんですか？　今はそんな事より、娘を殺した犯人を――」

「旦那さんは本当にうつ病による自殺だったんですか？」

小笠木がそう訊ねると、夏海はキッと睨み返す。

「ええ、そうですね。夫は仕事熱心でしたからね。その事業が失敗し、会社から責任をとらされたすえ、うつに罹<sup>かか</sup>って——自殺した。そのことは、警察も知っているはずですよ」

「彼女の言っていることは間違いありません。事実、会社との賠償金を請求した理由は、それでし、何より会社がそれを認めている」

小笠木が雀居に耳打ちをする。

「それじゃ、娘さんが上八瑞希さんと共謀していたことはご存知だったんですか？」

雀居が尋ねると、夏海は顔を歪める。

「上八…… ああ、あのじゃじゃ馬ですか？ 娘に何かしていたんですか？」

不貞腐れるように夏海は尋ねる。

「ええ。実は娘さんと上八瑞希さんは仲がよく、人知れずあつていたそうなんですよ」

雀居の言葉を聞くや、「それはありえません。何せ父親同士が陰悪なムードでしたからね。娘同士がそんなことするわけが」と夏海は笑い飛ばした。

「確かに—— ですが、それはあなたたち親だけでしょ？ 当人たちはそんなこと一度も思っていなかった」

「何を根拠に？ 娘は上八瑞希にいじめられていたんですよ？ それであの子は」

「彼女は自らいじめてほしいと、上八瑞希にお願いしていたそうです。そのことを去年までいた志登まどかという教師が証言してくれましたよ」

志登まどかの名前を聞くや、夏海は露骨に顔を歪める。

「知っているんですね？」

「ええ。志登先生は去年、娘がいたクラスの担任でしたからね。よく知っていますよ」

雀居の問いかけに、夏海は答えた。

「それじゃ、どうして何もしていない志登まどか先生が、学校を去ったのか……その理由もご存知じゃないんですか？」

「——な、何を？」と夏海は雀居の言葉に狼狽する。

「実はねえ、今回の事件。裏を返すと奇怪なことがわかりましてね。まず、直隆氏の会社同僚にお聞きしますと、直隆さんは確かに事業に失敗したが、責任を負うことではなかった。むしろそうしたのは会社側の責任である。という話が結構出てきてるんですよ」

「それならやはり賠償金を受け取るのは当たり前じゃないですか？」

“ほれ見たことか”と言わんばかりに、夏海は雀居を一瞥する。

「ええ。確かに責任を負わした会社が、家族に賠償金を払うのは致し方ありません。ですが、あなた……それ以外にもお金もらってるでしょ？」

雀居は落ち着いた口調で、夏海に訊ねた。

「な、何を言ってるんですか？ わ、私はちゃんと裁判で勝訴し、賠償金をもらっているんです」

小笠木が雀居と夏海の間に割ってはいる。

「実は、直隆さんの自殺には不振なところがありまして、首に縄で絞められた痕があったんです」

「あ、あるのは当たり前じゃないですか？ 夫は首を吊って自殺したんですよ」

夏海がそういうや、雀居と小笠木は、一息深呼吸する。

そして、雀居は一枚の写真を夏見に見せた。

それは牛頸直隆が検視にかけられた時の写真であった。

「あなたが法廷で証言したとおり、直隆氏が風呂場で縄を天井にかけ、自殺したのなら、首の付け根に垂直するような痕は出来ないんですよ。だって、首は自分の体重で絞められるんですから」

「そして一番可笑しいのは、重力によって首が絞められた時に出来

るはずの顎のラインに沿った縄の痕がなかったこと。これは要するに、遺体に血が通わなくなったあとに吊るしたと考えられるんですが、いかがでしょうかね？」

雀居が訊ねると、夏海はふらつと立ち暗みする。

「い、言ってる意味がわかりません。それじゃ、夫は自殺ではなく、誰かに殺されたってことじゃないですか？」

「ええそうですよ。それに遺体が発見されたのは風呂場だったそうじゃないですか？」

「それなら夫の自殺じゃないですか？」

夏海は雀居の失言に、含み笑いを浮かべた。

「検死の結果では、縄の痕は垂直になっていた。自分で絞めたのならば、首吊りと同様に、顎のラインに沿って、縄の痕が出来るはずなんですよね」

「それがどうかしたんですか？ 首を絞めたのなら、痕が残ってても可笑しくはないでしょ？」

「言いましたよね？ 自殺と他殺では、縄の痕が違うんですよ」

雀居がそう言うのと、夏海は視線を逸らし、

「それと娘が殺されたことに何か関係するんですか？」

「娘さんは哭浜海岸の崖から飛び降り自殺した—— ですが、本当は殺されたんじゃないんですか？ あなたに——」

そついうや、雀居は一枚の写真を夏海に見せた。

その写真は、昨日裕樹から受け取った写真であり、鑑識が写真を分析し、見やすくしたものだった。

それを見るや、夏海表情は恐怖に震え上がり、その場に跪いた。「それじゃ教えてくれませんか？ どうしてこんなことを？」

雀居は夏海を哀れむような表情で訊ねる。

「あ、あ、あの子が—— あの上八瑞希が悪いのよ。娘をいじめることなんてしなければ」

夏海はうわごとを言いながら、雀居を睨んだ。

「何を言ってるんだ？ 牛頸静江は、自ら上八瑞希にいじめてほしいとお願いしてるんだ」

小笠木がそういうが、それを雀居が言葉をとめる。

「そうよ。夫を殺したのだって、あの一家が悪いのよ—— 私は何も悪くない。あの時だって、あの時だって——」

雀居は小笠木に家の中を調べるようにと、視線で命令すると、「すみません、ちょっと失礼します」

小笠木は夏海の横を通り過ぎ、家の中に入るや、調べ始めた。

そして30分後、小笠木が慌てて雀居のもとに戻るや、「警部、ちょっと来てください」という。

それを聞くや、雀居はしがみついている夏海を振り払い、部屋の中に入るや、小笠木に案内される。

そこは台所で、雀居は部屋を見渡すや、床下収納棚に目があった。その扉が開けられている。

雀居が生唾を飲み込み、棚の中を覗き込むや、顔を歪めた。

棚の中にあつたのは、“人ひとりが体育すわりするくらい”に膨らんだ黒い袋が入れている。

袋の中身が腐っているのか、子蝇が集っている。

「こんなところにどうしてゴミ袋が？」

小笠木がそう雀居に尋ねると、「小笠木くん、至急、鑑識を呼んでください」

静かにそう命令すると、小笠木は言われたとおり、携帯で鑑識課に連絡を入れた。

——数分後、牛頸夏海は、牛頸直隆・静江殺害、および、上八瑞希殺害における、最重要参考人として、連行された。

気付くと俺は自分の教室にいた。その景色は灰色に色付けされており、それが夢だということが、次第にわかってきた。

「どういうこと?」

机を挟んで二人の少女が会話している。一人が困惑した表情で尋ねる。

「そのままの意味よ、瑞希。私を、みんなの前ではいじめていて――私があなたにしたように」

もう一人の、髪の短い少女は椅子に座り、静かに言う。

「あなたが私にしたことに対しての竹箆返ししっぽがえをしろってこと? でも、あなたは自分のお父さんがどういう立場なのかを考えてやってたんでしょ?」

困惑するように、上八瑞希と思われる人物が表情を暗くする。それじゃ、今話してる相手は牛頸静江か?

「私はあなたとは仲良しでいたい。でも、お父さん同士が犬猿の仲だったし、この前の運動会だって、あなた寂しそうだったもの」

「それは――お父さんとお母さんが仕事忙しくて」

上八は視線を逸らすように俯く。

「私が一緒に食べようって誘っても、あなた来なかったでしょ?」

牛頸がそう言うのと、「だって、私が一緒だと、あなたたち家族が困るでしょ?」

「そんなことないよ。私は大歓迎だけど、お父さんたちだって、一緒に食べてくれたと思うよ」

上八は視線をゆっくりと牛頸に戻す。

「私は何も変わらない。小さい時から瑞希と一緒に遊んでたんだもの。親がどんなとか、そんなの私たちには関係ないでしょ?」

「そうだけど……でも、おじさんとお父さん、すごく仲が悪いし、

その事でお母さん同士も険悪だし」

「ほんと、大人の険悪な関係って、ストレートじゃないから嫌い。嫌いなら堂々と嫌いつて云えばいいんだ」

踏ん返り返るように牛頸が云うと、「それが出来ないから人間なんだよ。私たちだって、人に言えないことだっていっぱいあるですよ？」

上八がそう言うのと、牛頸は「そうだね」というや、笑い出した。

「お父さん…… 本当に自殺なの？」

上八が申し訳ないように尋ねる。

「私は——自殺だなんて思っていない。お父さんが、あれくらいの失敗で自殺するとは思えないし、なにより、会社の存亡するほどの損害を与えるくらいのことをしたのなら、責任感の強いお父さんだったらしたかもしれないけど——でも、実際は数百万くらいの損害だったらしいよ」

それを聞くや、上八は何か考えるように、「お父さんが同じ会社だったけど、会社自体は心配しなくてもいいって言ってた」

「それって、矛盾してるよね？ 失敗だって、すぐに返せるくらいのことだったんでしょ？」

上八がそう尋ねると、牛頸は頭を振り、

「お父さんが、仕事の失敗に責任を感じて——自殺した。それがどうしても信じられない。だから私、今日の晩にでもお母さんに訊いてみようと思ってるの。お母さんだったら何か知ってるかもしれないし、それに——」

牛頸が言葉を途中でとめたことが気になり、上八はそのことを尋ねた。

「まだ確信してるわけじゃないけど、お母さん宛てに保険会社からの連絡通知が来てたんだ—— 生命保険の」

「保険金殺人をしたってこと？ でも、自殺じゃ落ちないんじゃない？」

上八がそう言う。牛頸は一息吐くと、

「それはまだわからないし、もしかしたら、私やお母さん自身にか  
けられている保険かもしれない」

牛頸は信じていたのだろう。それが事件の真相であつたとしても、  
自分の母親を――

俺は昨日の晩、父さんから聞いた話を思い出していた。

「牛頸夏海は夫が自殺し、葬儀が行われたあとに、夫が勤めていた  
会社に対して、民事裁判を起こしている」

牛頸直隆が会社を与えた損傷に対しての責任を感じ、自殺した。

そのことで、妻である夏海が会社に損害賠償を求めた。

「だがな、これがどうも不自然なんだ」

「――不自然？」

俺は父さんに鸚鵡返しするように尋ねる。

「賠償金というのは、被害者の損害に対して、加害者が支払わなけ  
ればいけない金額のことをいうんだがな。今回のケース。最終的に  
どっちが被害者だと思う？」

そう訊かれ、俺は少し考える。

「えっと、牛頸直隆が主任を勤めていた事業が失敗して、会社に損  
害を与えている。その責任を感じて、牛頸直隆は自殺している。そ  
のことを今度は妻である夏海が、会社に対して損害賠償支払いを訴  
えている―― あれ？」

俺は考えに行き詰る。

「な？ これじゃ、どっちが被害者かわからんだろ？ 自殺したの  
は本人の責任だからな、そもそも、うつ状態だったのかというのも  
曖昧でな。会社自体に損害を与えたのなら、単純に直隆をかくしゅ誅すれ  
ばいい。だが、それ以前にも似たような事業をしていたが、失敗し  
たことは一度もないそうなんだ」

「それじゃ、失敗したのはその一軒だけだったってことか？」

「会社側からしてみたら、事業自体も取り返せるくらいの被害だったようだ。つまり、直隆が責任を感じていたのは、別にあったんじやないかと思っただが」

「別に……」

俺はそう言っていると、考えに耽っていた。

「たとえば、自分の立場を現状維持するため——とかな」

——現状維持？

「そうだな。たとえばお前と父さんの関係だな。お前にとって父さんは何だ？」

「俺にとつての父さん？ そうだな。前はほとんど仕事で家にいなかったから、たまに家に帰ってきてても誰だ？って感じだったな。多分それ、小3まで続いてたぜ？」

俺がそう言っていると、ガタガタと何かが落ちた音が聞こえた。

「ひどいなあ。まあ、千鶴も小さいときはそんな感じだったな」

父さんは椅子から転げ落ち、苦笑いを浮かべている。

「でもよ。今はちゃんと帰ってきてくれてるから、母さんも安心してるって言ってたぜ」

「母さんにはいろいろ迷惑をかけてしまっているからな。今は家族サービス中ってことだ」

父さんはそう言っていると、少し顔を俯かせた。

「親というのは、子供に与える影響は計り知れない。それが大小異なることでもな」

父さんは、俺の部屋の天井に吊るされているサンドバッグを見るや、

「お前も変わったな。いや元々父さんが悪いんだが」

「何言っただよ。俺はあのことがあったから、父さんの仕事が多んなものなのかわかったし、事件は犯人が逮捕されたから終わりじゃないってことも知った」

父さんは立ち上がると、サンドバッグの前に立ち、一発殴った。

「お前が空手を習い始めたのも、本当はいじめていた生徒に仕返ししようとしたからだろ？」

「最初はな。でもぜんぜん強くなかった」

俺は机に向かい、伏せていた写真立てを立てた。

「雫ちゃん—— 頑張ってたんだな」

父さんはそういいながら、俺の肩を叩いた。

「それじゃ、父さんは寝るからな—— お前は人を助けたんだ。胸をはれ」

そう言つと、父さんは俺の部屋から出て行つた。

背伸びをし、一息吐くと、俺は机からノートを取り出し、それをパラパラと捲つていく。

「ほんと、頑張ってたんだな。俺なんかと一緒にいたいからつて」

ノートには稚拙な文字で、授業であつたことを書き記していた。

雫の知能ははつきりいつて、低い。人と比べたことはないが、明らかに低の低だった。

それでも必死になつて、俺と同じ中学に受験で合格した。

もしかしたら、俺があいつを殺してしまったんじゃないだろうかと思つたことがある。

だけど、引越す前、雫のお母さんに言われたことがある。

『雫が自主的に勉強することなんて、今のいままで一度もなかったの。理由が裕樹くんと一緒に学校に行きたいってだけだったみたいだけどね。それに学校に行こうと決めたのはあの子がなの。あなたが負い目を感じなくてもいいのよ』

おばさんは慰めようとしていつてくれた。

あいつが自殺したことも、負い目を感じなくていいと云つた。

だけど、本心では俺なんかに会わなければよかったと思つていたと思う。

——その真実はもう闇の中だ。

その原因を作ったセクハラ教師は雫が自殺したあとも、平然と学校に来ていた。

みんな他人のことは見てみぬ振りだったけど、俺は雫のことがあったから、どうしてもそれが出来なかった。

その教師は、再びターゲットを決め、女子生徒——仮にSとして、セクハラ教師はSにセクハラをしようとした。

——それを俺はただ止めようとしたただけだ。

その件で、俺は停学処分を受けていたが、父さんの仕事の都合上、一週間もしないうちに引越すことがすでに決まっていたから、俺のささやかな犯行は、いたちの最後っ屁みたいな感じだった。

引越す時、そのとき助けたSから、一言云われたことがある。

「もし、次の学校でも似たようなことがあったら、助けてあげて」

それだけを云うと、Sは深々と頭を下げ、ずっと遠くに行く俺たち家族を見送っていた。

俺は写真立てに写っている雫を見る。

「——うしっ！」

俺は深呼吸すると、写真立ての中から写真を取り出し、それを机の鍵つき棚の奥に仕舞いこんだ。

## エピソード――

日曜日の朝、枕元においてあった携帯が鳴り響いている。  
まだ覚醒していない手で携帯を取り、眠気眼に液晶を見た。  
――相手は五ヶ山だった。

「もしもし？」

『あ、裕樹くん。ごめんね。朝早くから  
電話先の五ヶ山は申し訳なさそうに言う。

「どうしたんだ？ こんな朝早くに」  
俺がそう尋ねると、

『あのね、裕樹くんが学校を去ってからの放課後、みんなで話した  
んだけど――』

俺は五ヶ山の話聞いて、驚いた。

「あ、きた。裕樹くんこっち」

潮風を体を感じながら、俺は五ヶ山たち、クラスメイトの元へと  
歩み寄る。

「みんなどうしたんだ？」

俺が五ヶ山や御手洗に尋ねると、

「この前、裕樹くんが学校を早退したあと、みんなで相談したの。  
私たちは何をすべきかって―― 結局決まらなかったけど、でも  
まずやらないといけないことあるだろうなって」

五ヶ山はそう言うと、御手洗や高平、奴山といったクラスメイト  
たちが、一斉に海のほうに目をやるや、

『ごめんなさい』

——と、深々と頭を下げ、謝った。

「私たち、不本意だったとしても、クラスメイト二人を見殺しにしているんだよね」

「あ、そのことなんだけど——」

俺が御手洗に本当のことを言おうとしたときだった。

道路のほうから車が一台、丘のほうに入ってくるや、俺と五ヶ山、御手洗の近くで停まった。

それが雀居警部と小笠木巡査の車だとわかったのは、その二人が降りてきたからだ。

「このたびはご協力感謝します。あなたがくれた写真がなかったら、多分迷宮入りでしたよ」

雀居警部の言葉を聞くや、五ヶ山と御手洗が目を大きくし、

「それじゃ、牛頸さんを殺した犯人が捕まったんですか？」

そう御手洗が言うと、雀居警部は顔を背ける。

「まあ、犯人は捕まりましたし、今取り調べていますが、徹底的な証拠がある以上、言い逃れは出来ないでしょうね」

——言い逃れ？ 俺はそれを雀居警部に尋ねた。

「犯人は——」「警部っ！」

雀居警部が言おうとしたのを、小笠木巡査が止めたが、

「いや、彼らは事件に協力してくれたんです。誰が容疑者だというのは知る権利はあるでしょ？」

「ですが——」

「それに、もしかしたら被害者二人だって、彼らに知ってほしいと思いますよ」

小笠木巡査はそう言われ、身を引いた。

「それじゃ犯人ですけど、牛頸直隆とその娘である静江。そして水

死体として発見された上八瑞希。以上の三人を殺したのは――牛頸夏海でした」

一瞬間があいたが、五ヶ山と御手洗がのどを鳴らすと、  
「ちよつと待ってください？ それじゃ牛頸さんを殺したのは、お母さんだつたつてことですか？」

御手洗がそう尋ねると、雀居警部は頭をかく。

「いや、牛頸静江の場合は少し違つてたんですよ。あの日、牛頸静江がここで突き落とされた時間、瞬間的に強い浜風が起きたそうなんです。それに牛頸静江は自殺しようとしたのではなく、母親を問い詰めようと決意していた。部屋を改めて調べたら、上八瑞希宛に手紙が入ってましたよ」

「それじゃ、牛頸夏海が上八瑞希を殺したのは――」  
俺がそう言うと、雀居警部は少し頷き、

「ええ、娘をいじめていたのは、上八瑞希だと考えたんでしょうね。もちろん、上八瑞希自身は牛頸静江にいじめるようにお願いされていたわけですし、二人をよく知っている志登まどかさんのことを訊ねると、途端に態度を豹変されましたよ」

「それつてどういうことですか？」

「牛頸夏海は自尊心の低い人<sup>プライド</sup>だつたようで、夫の直隆が会社での仕事を失敗したことが赦せなくなり、彼を絞め殺したと供述しています。娘の友人関係も、徹底的に管理していたそうですよ」

御手洗の質問に、小笠木巡査が答える。

「志登まどか先生は、静江と瑞希がいい友人関係だつたことを知っていたようです」

「今考えたら、あの二人、よく一緒に帰つてた」

「多分純粹に一緒に帰つてたんでしょいうな」

「それじゃ私たち、勘違いしてたんだ」

五ヶ山と御手洗が俯く。

「それじゃ、志登まどかが学校を辞めさせられたのも」

「ええ、牛頸夏海が女原を利用して、志登まどかを辞めさせた。女原にそのことを問い詰めたら、すぐに白状しましたよ。大金をもらったって言うてね」

それを聞くと、俺はやるせない気持ちになった。

「そうだ。牛頸さんは崖から突き落とされたんですよね？　その遺体はどうなったんですか？」

五ヶ山がそう尋ねる。雀居警部は一息吐くと、

「牛頸夏海の供述によると、娘は強い浜風で体勢を悪くし、崖から落ちそうになった。それを助けようとしたが、間に合わず、転落した。すぐに崖下までおり、遺体を発見したが、夏海は気が動転していたようです」

「それってどういう……」

御手洗が首を傾げる。

「要するに顔がグチャグチャに潰れて、みるにみられなかったってことか？」

俺がそう言うと、五ヶ山と御手洗が俺を睨む。

「ちよっと、変な想像させないでよ」

「いや、まったく塔原さんの言うとおりで、あまりの酷さに逃げ出したんだそうですよ」

雀居警部の言葉に、俺は何か引つかかっていた。

それは五ヶ山や、御手洗も同じだったようで、

「それって、死んだ伊邪那美いざなみを、黄泉国まで探した伊邪那岐いざなぎがしたのと同じじゃない？」

「たしかに、でもあれは伊邪那美いざなみが自分の醜い姿を見られたから」  
二人の会話を聞きながら、雀居警部は少し訝しげな表情を浮かべた。

「果たして、そうでしょうか？　伊邪那岐いざなぎは危険を承知の上で、黄泉国にいった。それはただ一途に、妻である伊邪那美いざなみに会いたか

つたからだと思いますよ。それがあつたからこそ、生と死が存在するようになった。それに伊邪那美いざなみは自分の醜い姿を見せたくなかった。だから伊邪那岐いざなぎを追いかけ殺そうとした」

「なんか切ないですね。大切な人の死に顔なのに、見れないのって小笠木巡査がそう言う」と、

「いや、私たちはいろいろな死体見るでしょ？ もう職業病でなれちゃってますけど、やっぱり怖くなるのが当たり前なんですよ。だから、牛頸夏海が取った行動は——可笑しくないと思うんですけどね」

雀居警部の言葉に切れがない。

「何か引つかかることでも？」

俺がそう尋ねると、「いや、彼女は逃げたあと、気が動転していた。その後の行動が可笑いなんですよ」

「——可笑しいって？」

御手洗がそう言うのと、雀居警部は周りを気にし始めた。

「一応まだしっかりとした供述を得てはいないんですけど、家の台所に床下収納ってあるでしょ？ あの中に死体をゴミ袋の中に入れて遺棄されていたんです」

「いつ、遺棄？」

御手洗が大声で聞き返す。俺と五ヶ山が慌てて、御手洗の口を押さえ込んだ。

「でも、牛頸夏海は娘の死体を見た後、逃げたんだよね？」

「ええ。彼女が言っていることが本当なら——遺体を自分の家に隠すなんてしないでしょ」

「それじゃ、誰が牛頸さんの死体を？」

五ヶ山がそう訊くと、「これは私の憶測でしかありませんが、おそらく上八瑞希でしょうな。彼女は牛頸静江と連絡を取り合っていましたから、いなくなった事にすぐ気付いても可笑しくないでしょう？」

云われてみれば確かにそうだ。

「つまり、牛頸静江の死体を家に帰したのは――」

「おそらく、上八瑞希さんでしょうね。彼女の家を調べたら、自分の家以外の鍵が発見されました。確認したところ、それが牛頸家の合鍵だったようなんですよ。いつでも好きなきに來ていいという静江さんのメッセージだったんでしようけど、近所の人に聞くと、結局一度もこなかったそうです」

「でも、どうやって死体を？」

そう尋ねたが、雀居警部は頭を振った。おそらく真実は、亡くなった上八瑞希しか知らないのだろう。

「それと、もうひとつ。牛頸静江の部屋から発見されたんですが、上八瑞希との交換日記でしょうな、携帯を母親に監視されていた以上、二人で共有することはそれくらいだったでしょうし」

「交換日記か……　　そういうえ昔、雫が雑誌の付録かなにかで、それを持ってたから、俺と一緒に何日かやってたつけ。まあ、一ヶ月ももたなかったけど」

俺がそう言うのと、五ヶ山が顔を覗き込む。

「へえ、意外。そういうのちゃんとするんだ」

「俺はちゃんとしてたけどな。言いだしっぺの雫はほとんどやらなくて、飽きてたからな」

「まあ、静江さんと瑞希さんのはちゃんと書かれてましたよ。ただこれは当人たちのプライベートにかかわることですし、今回の事件には関係ないと判断されたので、お伝えはしませんが」

雀居警部がそう言うのと、「ああ。人の日記見るほど野暮なことはないって」

俺がそう言うのと、雀居警部は「そうですか」と頭をかいた。

「それじゃ、私たちはこれで失礼します」

そう言つと、雀居警部と小笠木巡査は、車に乗り込み、その場を立ち去つた。

俺は車を見送ると、海のほうを見た。

その時ちようど、哭沢女神が祭られている祠が目に入ると、急に風が強くなつたのを感じ、俺は咄嗟に目を細めた。

顔を上げると、祠がある崖の上に少女が立っていたのが目に入つた。――そして、少女は俺を見るや、静かに微笑み、スーと消えた。

「どうかしたの？ 裕樹くん」

五ヶ山と御手洗にそう言われ、俺はハツと我にかえる。

「いや、なんでもねえよ」

俺は誤魔化すように二人にそう言つた。

あの少女は――いや、考えるのはよそう。

考えたところで、答えがわかるもんじゃない。

彼女がどうして自分をいじめるように上八瑞希に言つたのか、それは多分、一種の反抗だつたんだと思う。

自分の見解だけで閉じ込めていた母親に対しての、ささやかな反抗。

ただ友達として、上八瑞希と付き合っていた牛頸静江の反抗。

「裕樹くん、おなかすいてない？ そろそろお昼ごろだから、一緒に食べない？」

五ヶ山がそう言つと、それに答えるように、俺のお腹が鳴つた。

「ははは、体は正直だ。それじゃ食いに行くか」

笑いながらそう言つと、つられたのか、五ヶ山と御手洗も笑つていた。

## エピソード——（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2306v/>

---

SeA SidE

2011年10月29日03時12分発行